



国立大学法人 島根大学
生物資源科学部

教員紹介
パンフレット
2026



豊かな自然の中で、 食、農、環境問題に取り組む

生物資源科学部には「生命」「生産」「環境」をテーマにした生命科学科・農林生産学科・環境共生科学科の3つの学科があります。これらの学科ではそれぞれの専門的な学びに加えて、農場・森林・海などの附属生物資源教育研究センターのフィールドを活用した実習や研究を通して、「ここにしかない学び」を体験できることが大きな特徴です。本学部は、生物資源の利活用を中心に、多様な生物の生命現象の解明、医薬・農業分野、食品の開発、持続可能な農業生産技術と経営・経済分野、未利用資源の利活用と環境調和型社会の構築に貢献する教育・研究を推進しています。また、本学部にはそれぞれの分野で活躍する多くの教員が在籍しており、動物、植物、微生物などの生物や、それらを育む水圏や土壌圏を研究対象としています。さらに、経営・経済学、数学、コンピューターシミュレーションなどの手法を駆使し、社会の課題解決を通じて豊かな社会の実現を目指した研究に取り組んでいます。

本パンフレットは、高校生、大学生、企業、研究者の皆様に向けて、本学部の教員が取り組む研究テーマをわかりやすく紹介することを目的に作成しました。本学部や大学院への進学を希望される方々、地域とのつながり、さらには共同研究の推進に役立つことを願っております。



島根大学生物資源科学部長
上野 誠



目 次

生命科学科

P6~30

農林生産学科

P32~51

環境共生科学科

P54~78

附属生物資源教育研究センター

P80~83

先鋭研究部門

P86

索 引

P88~93

SDGsに関連する 生物資源科学部の研究

2030年までに世界をより良い未来に向かわせる道筋になることを目指し、2015年、国連では「変革する世界：2030年持続可能な発展アジェンダ」が採択されました。その中で、世界が最も緊急に取り組む課題として、17のSDGs「Sustainable Development Goals（持続可能な開発目標）」が提示されています。これらの目標達成のために大学が果たす役割は大きく、島根大学でも、大学憲章の中に掲げた「自然と共生する豊かな社会の発展に努める」ことに基づき、「SDGs行動指針」を定めています。特に、「生命」、「生産」、「環境」に係わる教育・研究を通して、地域社会の発展と持続可能な環境調和型社会の確立に貢献できる人材の養成をめざしている生物資源科学部では、ほとんどの研究が何らかの形でSDGsに関連しています。本パンフレットでもSDGsに関連する研究に該当するSDGsロゴを表示しています。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

世界を変えるための17の目標



生命科学科では、微生物から動物・植物に至る多様な生物が示す様々な生命現象についての基本的な理解と根本原理の解明をめざすとともに、これら生物が有する様々な有用機能を食品・化学工業、医薬・農薬製造業などの生物・化学産業に役立てるための教育と研究を行います。生命現象の不思議さを追求し応用する過程を通し、論理的思考力、問題解決能力を身に付け、社会で活躍するための資質能力を向上させることができます。

Department of Life Sciences

細胞生物学 コース

細胞生物学コースでは、細菌や原生生物から動・植物まで幅広い分類群を対象とし、それら生物が示す様々な生命現象を分子・細胞・組織・個体レベルで捉え、理解する能力を育み、ライフサイエンスの発展に寄与し、様々な分野で活躍する人材を育成することを目標にしています。

水圏・多様性生物学 コース

日本海から宍道湖・中海を含む湖沼河川まで多様な水域とその周辺の陸環境がもつ豊かな生物多様性を基礎科学の観点から捉え、理解する能力を育み、生物資源の持続・有効利用と環境保全に寄与し、この分野を牽引する人材を育成することを目標にしています。

生命機能化学 コース

生命現象は、生命体内に存在する多様な分子の働きが複雑に組合わさることで引き起こされます。そのメカニズムを生物と化学の両方の視点から理解し、有用な機能として医薬系や化学系の分野に応用する知識と技能を有した人材の育成を目指します。

食生命科学 コース

食品に含まれる栄養成分や有用成分を人体が活用する仕組み、食料の生産に寄与する生命の仕組みなど、食に関係する生命現象を理解し、食品やバイオテクノロジーの分野に応用する技能を有した人材の育成を目指します。

生 命 科 学 科

キー
ワード

生理、発生、進化、生態学、生物多様性、遺伝学、共生、
進化、原生生物、食品、腸内細菌、酵母、遺伝子工学、
分子分光學、分子認識、神経伝達物質、農薬、
ストレス応答、植物

ギャバ(GABA)と 転移RNAの分子生物学



赤間 一仁 教授

キーワード

イネ、シロイヌナズナ、
ギャバ (GABA)、転移RNA
(tRNA)、スプライシング

13 気候変動に
具体的な対策を



今tRNAとGABAが面白い！

「山椒は小粒でピリリと辛い」ということわざがあります。一見小さくても、優れた性質があり、決して侮ることができないことのたとえです。細胞の中で働くtRNAとアミノ酸の一種であるGABAはとても小さな分子ですが、生物の生存になくてはならないものです。私たちはこれら分子が植物が生きていく上でどのような優れた役割を担っているのかを研究しています。

シロイヌナズナから単離したtRNAスプライシング酵素の新規機能の解明

tRNAをコードする遺伝子の中にはイントロンを持つものがあります。私たちはドイツの研究グループと共同で、植物tRNAイントロンのスプライシングに関わるtRNAリガーゼが核だけでなく、

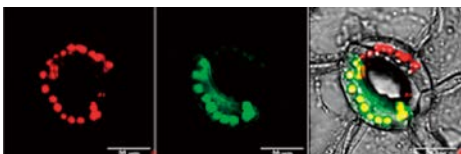


図1 ソラマメ孔辺細胞におけるtRNAリガーゼの葉緑体局在
(左) 葉緑体の自家蛍光(赤色)
(中) tRNAリガーゼを緑色蛍光タンパク質とつないだ融合タンパク質の蛍光(緑色)
(右) 明視野で葉緑体自家蛍光(赤色)と緑色蛍光との重ね合わせ(重なったところは黄色)

葉緑体にも局在していることを明らかにしました(図1)。植物細胞の中で葉緑体は中心的な役割を果たしています。その中でtRNAリガーゼがどのような働きをしているのか大変興味深く、その解明を目指しています。

ストレス応答と植物におけるGABA機能

イネは、GABA合成に関わる5つのグルタミン酸脱炭酸酵素(GAD)遺伝子を持ちます。私たちが単離したGAD2遺伝子だけがカルモジュリン(CaM)結合ドメインを持たない新規なGADタンパク質をコードします。この遺伝子の改変を元にして、通常のお米に比べて100倍以上のGABA(ギャバ)を含むお米の開発に成功しています(図2)。

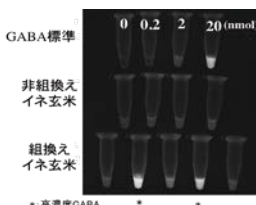


図2 コメに含まれるGABAの分析

tRNAとGABAを用いた基礎研究から応用研究

tRNA連結酵素が葉緑体に存在するのは植物が直面するストレスが関係するのではないかと考えています。この連結酵素が葉緑体の中で働くRNAの修復に関与している可能性を検証する実験を現在進めています。

新規なイネGAD2は単にマイナーな遺伝子なのか、あるいは特別な機能を持つものなのか、その解明を進めています。また、現在、ゲノム編集技術(CRISPR/Cas9)を用いて、5つのイネGAD遺伝子の制御ドメインの欠失を進めており、イネGADが生体内でどのように調節されているのか、そしてその成果を基盤にした応用研究も目指しています。

ミドリゾウリムシを使って 真核細胞誕生の謎にせまる



児玉 有紀 教授

キーワード

ミドリゾウリムシ、細胞内共生、
クロレラ、進化

6 安全な水とトイレ
を世界中に



ミドリゾウリムシ

皆さんはミドリゾウリムシという生物をご存知ですか？ミドリゾウリムシは淡水に生息している、体長が0.1ミリ程度の綺麗な緑色をしたゾウリムシ

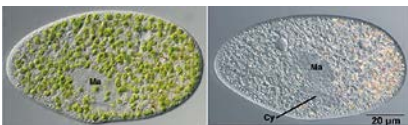


図1 ミドリゾウリムシの顕微鏡写真

です(図1左)。緑色の正体は細胞内に共生しているクロレラです。ミドリゾウリムシは相利共生の関係にあるクロレラを除去しても生存できるため(図1右)、真核細胞誕生のプロセスの解明の新たなモデル生物として注目されています。

クロレラがミドリゾウリムシの細胞内に共生する過程が明らかになった

真核細胞内のミトコンドリアと葉緑体は、元々は独立して存在していた細菌が、10~20億年前に真核細胞の元になった細胞の内部に共生して進化したと考えられています。細胞内共生はその後も繰り返し行われて、生物の進化と多様化の大きな原動力となっていますが、その成立条件はほとんど明らかになってい

①ミドリゾウリムシの食胞内で一部のクロレラがリソソーム酵素に耐性を示す



②クロレラがリソソーム融合後の食胞膜から芽芽によって細胞質中に脱出する



③脱出したクロレラを包む食胞膜がリソソームの融合を阻止する PV 膜に分化する



④PV 膜に包まれたクロレラが、トリコステルやミトコンドリアが存在するミドリゾウリムシの細胞表面直下に接着する



図2 クロレラの共生成立に必要な4つのプロセス

せん。相利共生の関係にある生物同士の多くはそれぞれを引き離すと、弱ったり死んだりしてしまうためです。しかしその点を解決できるのがミドリゾウリムシです。私達はクロレラがミドリゾウリムシに共生する過程を観察するための最適条件を確立し、50年以上不明であったクロレラの細胞内共生成立過程の全容と、共生成立に必要な4つのプロセスを初めて明らかにすることができました(図2)。

目指すところ

ミドリゾウリムシを使って細胞内共生の成立条件が明らかになれば、真核細胞誕生の謎の解明や、任意の細胞の組み合わせで人類や環境のために有用な細胞を作り出したり、ミドリゾウリムシの活発な食作用を利用した水の浄化等も可能になるかもしれません。皆さんも綺麗なミドリゾウリムシを使って一緒に研究してみませんか。



研究室のホームページ

筋肉よりも速い！ 原生生物の細胞運動



石田 秀樹 准教授

キーワード

原生生物、繊毛虫、スピロストマム、収縮速度

14 海の豊かさを
守ろう



世界最速の収縮をする細胞は何か？

地球上の生物で最も早く収縮運動をする生物は何でしょうか。収縮運動と言えば、すぐに思い浮かぶのは筋肉細胞でしょう。チータは筋肉運動により時速100キロにも達する速度を出すことができ、地上最速の動物と言われています。しかし、最も速い筋運動は、昆虫やハチドリの飛翔筋で、毎秒100回以上の収縮が可能です。では、飛翔筋が最速の収縮運動をする細胞なのでしょうか。

池の中で最速の細胞運動！

収縮運動の代表格である筋細胞よりもさらに早い収縮をする生物が知られています。それは、淡水産の繊毛虫であるスピロストマム (*Spirostomum*) です。スピロストマムの細胞内にはマイオネームと呼ばれる繊維系が張り巡らされており、この繊維が収縮することで細胞全体が収縮すると考えられています。収縮に要する時間は1~2msec (1000分の1秒) 程度です。



スピロストマムの光学顕微鏡写真 a: 伸長状態、b: 収縮状態

細胞運動がどのようにして起こっているか知るためには？

スピロストマムの微小な細胞の中で、最速の運動がどのように生み出されているかを知ることは容易ではありません。電子顕微鏡によって細胞の内部を観察したり、収縮のエネルギーがどのように使われるかを測定することが必要です。研究が進むにつれて、マイオネームを構成するタンパク質がヒトを含む多くの生物で発見され、繊毛運動や細胞分裂の制御に関わっていることも明らかになってきました。マイオネームの運動の仕組みが分かれば、将来ミクロのレベルで動作するナノマシンのモーターとして利用できるかもしれません。また、繊毛運動や細胞分裂に不具合が起こる病気の治療に役立つかもしれません。それにはまだまだたくさんのことを明らかにする必要があります。皆さんも最速の収縮機構について研究してみませんか。

イネに約1,500種類ある 輸送体の機能を明らかにする



秋廣 高志 助教

キーワード

イネ、輸送体、トランスポーター、
酵母タンパク質発現ライブラリー

15 陸の豊かさも
守ろう



イネには約1,500種類もの膜輸送体がある

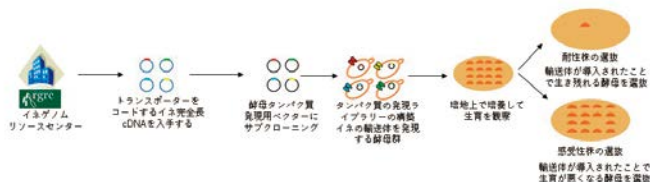
2004年にイネのゲノム解読が終了し、イネには約3万種類の遺伝子があることが明らかになりました。そのうち、約1,500種類が膜輸送体であると予想されています。膜輸送体とは、低分子物質を細胞膜の内外へ輸送するタンパク質の総称で、現在までに、植物体のどこで、どの輸送体が、どんな物質を輸送しているかはほとんど明らかになっていません。植物の物質輸送機構の解明が進めば、環境ストレスや病気に強い作物、栄養価の高い作物を開発するうえで貴重な情報になります。例えば、ヒ素やカドミウムといった有害重金属を輸送する輸送体が明らかになれば、有害重金属を吸収しづらい安心・安全な作物を作ることができます。



実験材料であるイネ

イネの膜輸送体の機能を明らかにする新たな実験系の確立

イネを用いて膜輸送体の機能を明らかにすることは、イネ自体がとても複雑なので実はとても困難です。そこで、イネの膜輸送体遺伝子を酵母に導入して、イネの膜輸送体を持つ酵母を作り、その酵母を解析する方法があります。私たちは、イネゲノムリソースセンターから入手した約1,500種類の膜輸送体をコードする遺伝子を一つずつ酵母に発現させ、イネ膜輸送体タンパク質発現ライブラリーを構築しました。このライブラリーを用いれば、どんな物質を輸送しているかわからない輸送体を網羅的に調査することができます。



約1,500種類のイネの輸送体遺伝子をイネゲノムリソースセンターから入手し、これを酵母に導入し、その機能を明らかにする新たな実験系。

イネの膜輸送体を明らかにするということ

植物体内で作られた代謝物がいつ、どこで作られ、どこに運ばれて機能しているのかを明らかにするためには、輸送体の研究はとても重要です。みなさんも、イネの物質輸送の全容を明らかにする研究をしてみませんか？

小さくてかわいい巻貝から 神経系の作り方を理解する



大沼 耕平 助教

キーワード

巻貝、神経系、発生生物学、
ゲノム編集、遺伝子ノックイン

14 海の豊かさを
守ろう



巻貝から神経系がつくられる不思議を解き明かす

私たちがものを見たり動いたりするのは、すべて「神経系」のはたらきによるものです。この神経系がたった一つの受精卵からどのようにしてできるのかを、私たちは理解したいと考えています。そこで、細胞数が少なく調べてのが簡単だけれども複雑な構造の神経系を持つ「巻貝」に注目しました。その中でも *Biomphalaria glabrata* という淡水産の巻貝(図1)は、毎日のように卵を産み、わずか1.5ヶ月程で成長して産卵するという、実験に適した生活サイクルを持っています。



図1 巻貝の赤ちゃん(稚貝)。触角の根元にある黒い点は眼点。

ゲノム編集による変異導入率は驚異の100% !

最近、私たちはこの巻貝への遺伝子導入法(図2)とゲノム編集技術を確認し、安定して実験できるようになりました。このゲノム編集技術は非常に高効率で、卵の時に操作を加えた貝とその子貝について、ゲノム配列を

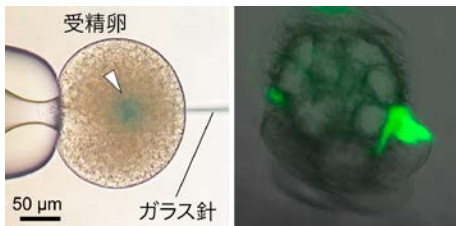


図2 遺伝子導入とGFP蛍光の観察。GFPの情報をもつDNA溶液(矢尻、青緑色)をガラス針で卵に注入(左)。その3日後、幼生の触角でGFPの緑色蛍光を検出(右)。

変えること(変異導入)に100%成功しています! これらの技術によって、神経系の発生に重要な遺伝子を特定できるようになりました。

遺伝子ノックインで神経系の細胞をもっと自由に操作する

今後の研究では、「遺伝子ノックイン」法をこの巻貝で確立し、神経系の特定の細胞を生きのまま光らせたり、その細胞の運命を変化させたりしようと考えています。このように細胞をより自由に操作できるようになれば、神経系の作り方をもっと詳しく調べることができます。ぜひ一緒に、巻貝を使って神経系の発生の謎を解き明かしませんか?

環境適応能力の起源と進化： 又タウナギに訊け！



山口 陽子 助教

キーワード

環境適応、進化、又タウナギ、生理学、生態学

14 海の豊かさを
守ろう



脊椎動物の環境適応能力

生命誕生から40億年、今や地球上のあらゆる場所に生物が暮らしています。私たち脊椎動物は「体内の環境を常に一定に保つ」特殊能力を獲得したことでさまざまな環境に進出してきました。脊椎動物の環境適応能力は、一体いつ・どのように獲得され、どんな変遷を遂げてきたのでしょうか？この問いに答えるべく、私はラボとフィールドの両方で、又タウナギという生物の研究を進めています。



図1 又タウナギ(蒲焼のウナギとは根本的に異なる生物)

又タウナギとは？

又タウナギは現生脊椎動物の中で最も早くに分岐したグループに属しています。原始的な特徴を多く残すとされ、無脊椎動物から脊椎動物への進化を理解する上で鍵となる生物です。彼らは海洋に棲み、生物の遺骸を処理する「海の掃除屋」(スカベンジャー)として、生態系で重要な役割を果たします。これまでの研究で、又タウナギの生理・生態に関する謎が少しずつ分かってきました(原始的に見えるけど実はそうではないこと、温度耐性、回遊行動、50年生きる可能性など)。詳細は研究室のHP(図3のQRコードからどうぞ)をチェックしてみてください。

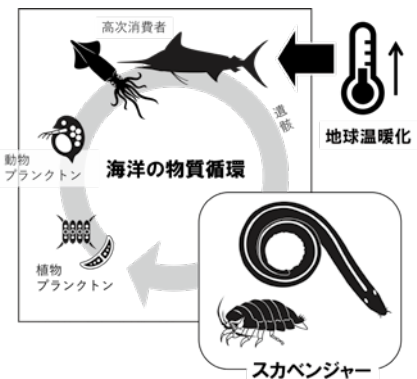


図2 生態系で重要な役割を果たす又タウナギ

目指せ国際拠点化！

又タウナギの生理・生態を理解することは、生物進化および生態系保全の観点から重要です。しかし現生種の大半は深海性で捕獲が難しく、研究が遅れています。ところが島根県近海の種は例外的に浅いところにも分布するため、研究に関して世界でも稀な好条件が整っています。この地の利を活かし、いずれは島根県を「又タウナギ研究の国際拠点」にしたいと考えています。



図3 研究室のHPはこちらから！

遺伝子で地図をつくる



荒西 太士 教授

キーワード

遺伝系統、進化放散、水圏生態、資源管理、遺伝的攪乱

14 海の豊かさを
守ろう



遺伝子型が親子の顔を似せている

生物とは、遺伝子というバトンを親から子へ引き継ぐための存在です。そして、動物でも植物でも全ての個体には固有の遺伝子型があります。例えば、日本人のルーツは縄文系と弥生系に分けられるというのを聞いたことがあるでしょう(図1)。細胞にあるゲノムの特定の遺伝子を解読すれば遺伝子型に分類でき、その遺伝子型で縄文系と弥生系を診断できます。つまり、固有の遺伝子型は、先祖代々の血の繋がりの記録であり、遺伝子で書いた家系図です。



図1 あなたは縄文系？ 弥生系？

ヤマトシジミの遺伝子型地図をつくる

島根県と言えば宍道湖、宍道湖と言えばシジミです。島根県は、海水と淡水が混じる汽水に生息するヤマトシジミの生産量が日本一であり、貴重な水産資源です。そこで、宍道湖のヤマトシジミのルーツを探るべく全国からヤマトシジミを集め、ミトコンドリアゲノムの遺伝子を解読しました。その結果、ユニークな塩基の変異を確認し、その遺伝子型の割合を地図にしました(図2)。山陰を中心とした日本海岸には赤が出現、太平洋岸は黄が優占、東北以北は青が優占という特徴的な進化放散を発見し、各遺伝系統を日本海系、太平洋系、北日本系と名付けました。

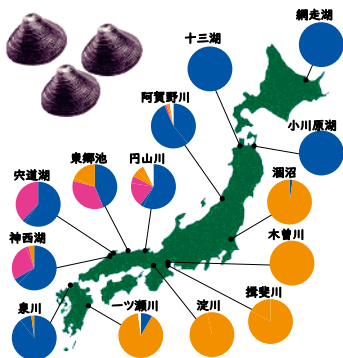


図2 ヤマトシジミの遺伝子型地図

地図を読み解けば過去と未来がわかる

遺伝子型地図を見て、九州・福岡県泉川の北日本系に違和感をもった人は鋭い観察眼です。泉川は過去に東北からヤマトシジミが移植されていました。ヤマトシジミに限らず有用な水産資源は頻繁に移植されます。地球規模で水産資源が減少する中、資源管理には移植が不可欠です。しかし、適切に移植しないと移植の系統と在来の系統の間で遺伝的攪乱のリスクがあります。遺伝子型地図は新しい産地を追加してアップデートを続けます。それが、適切な移植のための情報ソースとして、また将来起きうる遺伝的攪乱を防ぐ保全ツールとして、人々の生活と水圏の生態を未来へ繋ぐ“英知”だからです。

環境中のDNAを手がかりに生き物の過去・現在・未来を解き明かす



高原 輝彦 教授

キーワード

環境DNA、水産資源、希少生物、
宍道湖七珍、湖沼・河川

14 海の豊かさを
守ろう



多くの生き物たちは減少の一途をたどっている

身近な生き物たちを保全し、食卓を賑わす魚介類の持続的利用を可能にするためには、まずは、どこにどんな生き物がどのくらい棲んでいるのかを知る必要があります。簡単なようでやっかいなこの難題に簡便に明快な答えを導き出すことができないか、それが環境DNA研究の発端です。

環境DNAは現在だけでなく過去や未来もわかる？

環境DNA分析は、湖沼などの水や堆積物に含まれるDNA（環境DNA）を調べることで、対象生物の生息状況を簡便に評価できます。これまでに、宍道湖七珍ヤマトシジミ・ワカサギ・シラウオや絶滅危惧種オキサンショウウオ・タガメなどのモニタリングに本手法が極めて有用であることを実証しました。また、湖底の堆積物からは数百年以上前でもDNA情報を読み解くことが可能であることもわかり、さらには、環境DNAデータの蓄積によって生物の将来予測を実現できるかもしれません（図1）。

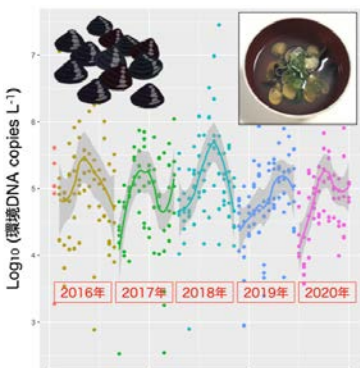


図1 ヤマトシジミの過去5年間の環境DNAデータと資源量変動の関係を解析中。シジミ汁（右上）はとくに二日酔いに効く！？

島根県だからこそその「地の利」を活かした研究を！

交通のアクセスが良くないなど、島根県のウィークポイントに見えるかもしれない特徴は、見方を変えれば、研究の手が入っていない未踏の自然環境が残されている強みに代わります。宍道湖や中海、隠岐諸島などは個性豊かな環境が目白押しです。島根県の強みを最大限に活かした環境DNA研究、私たちと一緒に最先端の研究分野に飛び込んでみませんか？（図2）



図2 雨にも、風にも、暑さにも、雪にも負けず、学生さんと力を合わせて野外調査も継続中。

卵が先かビールが先か!?



広橋 教貴 教授

キーワード

精子、イカ、走化性、二酸化炭素

14 海の豊かさを
守ろう



イカの精子はビールがお好き？

ビールのおつまみにスルメイカは合いますよね？ 実はスルメイカの精子もビールが好きなんです。ある晩、実験が上手くいかず、ヤケクソでスルメイカの生きた精子にビールを1滴かけたのですが、な、なんと精子がビールに向かって泳ぎだすではありませんか!? こ、これは、ノーベル賞。。。いやイグノーベル賞!?

ビール好きは実は二酸化炭素！

興奮冷めやまぬ翌朝、気の抜けたビールを再びイカの精子にかけたところ、まったく見向きもしません。その後、判明したことは、イカがビールに向かって泳ぐのはビールの中の炭酸ガス(CO₂)のせいだということです。では、何故、如何にして炭酸ガスに向かって泳ぐのでしょうか？ 普通、精子は卵に向かって泳がなければ受精できません。ところが、スルメイカやケンサキイカでは、メスがオスから受け渡された精子を袋に保管し、自分のタイミングで卵に精子をかけて受精させることができます。この現象を一般に「貯精」と呼びます。例えば、有名な話で女王アリは最長40年間も精子を蓄えます。では、何故CO₂かということ、細胞は(好氣的)呼吸によってエネルギーを得ます。精子も同様で、酸素を使ってATPを産生し、CO₂を排出します。その結果、精子達が排出したCO₂に集まるので精子集合ができます。「貯精」をしないイカでは精子は集合しません。ということは、「集合」と「貯精」と「ビール好き」に何やら深い関係がありそうです。



「面白いこと」から「大事なこと」へ

イカ精子のビール好きを見つけてから何年も経ちましたが、最近そのメカニズムが少しずつ見えてきました(図1)。それは、水素イオンとカルシウムイオンの流入が鍵となる、動物が起こすパニック(例えば、車の前に猫が飛び出して急に動かなくなる)現象とかなり近い反応のようです。しかし先に述べた3つの関係については未だベールに包まれています。若い学生らの思考力を新しい発想や発見に繋げて、これらの問題を解きたいと思っています。

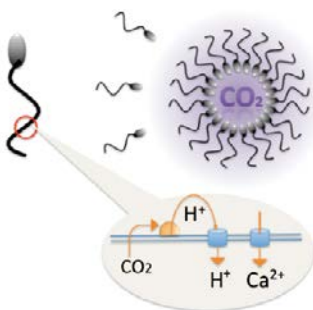


図1 イカ精子のCO₂走化性分子機構モデル

植物の多様性に学び、 細胞のことはを読み解く



古水 千尋 准教授

キーワード

ペプチドホルモン、植物、多様性、
コケ、チームサイエンス



細胞が話す短いことは「ペプチドホルモン」

私たちのように多くの細胞から構成される生物では、細胞はさまざまな分子を「ことば」のように使って、近隣の細胞や離れた細胞とコミュニケーションをとり、細胞の共同体を健全に保っています。

植物細胞のことはには、5~30個ほどのアミノ酸がつながった「ペプチドホルモン」と呼ばれる分子があります(図1)。10種類以上が知られており、次々と新しいものが発見されています。

PSK **YIYTQ**
CLE1 **RLSPGGDPRHH**
CLE7 **RFSPGGDPQHH**
RGF1 **DYSNPGHHPPRH**

図1 シロイヌナズナのペプチドホルモンの例
アミノ酸配列を1文字表記で示す。

未知のことはを尋ねて~植物の多様性に学ぶ

植物のペプチドホルモンの研究は、被子植物のシロイヌナズナやイネから始まり、現在も被子植物を使った研究が中心です。その中で、私たちは被子植物から遠縁の「苔(こけ)」に注目し、ゼニコケを材料としてペプチドホルモンの作用を研究し、新しいペプチドホルモンの同定にも取り組んでいます(図2)。

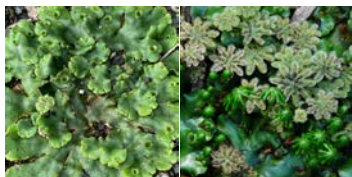


図2 研究材料のゼニコケ

鍵と鍵穴：ペプチドのことはの解読を目指すチームサイエンス

鍵と鍵穴のように、ペプチドホルモンは受け取る細胞側の受容体と呼ばれるタンパク質に結合して作用します(図3)。人間の言葉では、たった1文字の違いで意味が全く変わってしまいますが(例えば、PEACEとPEACH)、ペプチドホルモンの場合は、アミノ酸配列が多少異なっていても、同じ受容体に結合する「同じ」種類のホルモンとして作用します(例えば、図1のCLE1とCLE7)。私たちは、さまざまな分野の専門家と協力しながら、この揺らぎをもった「鍵と鍵穴」の関係を解明することを目指しています。「鍵と鍵穴」の原理がわかれば、ペプチドホルモンの受容体の予測や、有用な人工ペプチドホルモンの設計が容易になり、研究成果の社会への還元が加速すると期待しています。

あなたも私たちのチームに加わって、一緒にペプチドのことはを研究してみませんか？

最新のニュースは、私たちの研究室のウェブサイトをご覧ください。
他の研究も紹介しています。

<https://www.ipc.shimane-u.ac.jp/evobio/>

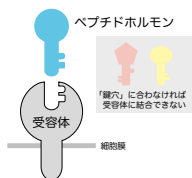


図3 鍵と鍵穴の関係



計算で解き明かす 生態系のバランスのしくみ



舞木 昭彦 准教授

キーワード

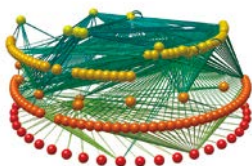
生態系、生物多様性、共存、
数理モデル

13 気候変動に
具体的な対策を



自然生態系はいかにして保たれているのか？

複雑な自然生態系には、生物個体数の変動を抑制する何らかの自己調節機構が備わっていると考えられます。なぜなら、農地などの単純な生態系では、害虫などの大発生がしばしば生じる一方で、多くの生物種が互に関わり合いながら共存している複雑な生態系では、特定の生物が突然大発生したり、次々に絶滅したりといった、個体数の大きな変動はあまり生じないからです。この自然生態系に内在する「自然のバランスの仕組み」が分かれば、世界的な大問題「人間活動に伴う生物多様性の喪失」を食い止めることが可能になるかもしれません。



生態系のイメージ

(丸は各生物種、リンクは捕食-被食などの関係) by Dunne et al. 2008

多様性の逆説

一方で、ロバート・メイ博士の理論(1972年)は、私たちの予想に反し、生態系は複雑なほど不安定になり保たれにくくなることを予測しています。この理論予測は、複雑な自然生態系が実際には存続

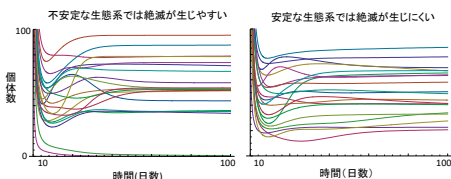
$$\frac{dX_i}{dt} = X_i \left(r_i - s_i X_i + \sum_{j=1, j \neq i}^N a_{ij} X_j \right)$$

生物の個体数変化を表現した数理モデル
(数理モデル：知りたい現象の特徴をそなえた数式)

しているという観察事実と矛盾しており、自然生態系においては生物多様性の維持を促進する何らかの未知の仕組みが備わっていることを示唆しています。メイの理論の発表後、「生態系の安定性の仕組み」を解明しようとする研究が、半世紀に渡り数多くの研究者によって行われてきましたが、未だにその仕組みはよくわかっていませんでした。

種間相互作用の多様性仮説

生物は互いに様々な関係で結ばれています。従来の研究は様々な相互作用の中でも、捕食-被食関係に着目してきました。しかし、現実の生態系には、他に



数理モデルをコンピュータ上で計算すると、様々な生物の個体数変動を追跡できる

も、互いの増殖を助け合う相利関係や、互いに増殖を邪魔し合う競争関係など、多様なタイプの関係が存在します。私はこれらの異なるタイプの種間相互作用の存在自体が生態系のバランスに大きく貢献している可能性を数理モデルを用いた計算により明らかにしました。

新しい種が生まれるとき



須貝 杏子 助教

キーワード

島、植物、種分化、環境適応



島は進化の実験場

本州からはるか南に浮かぶ絶海の孤島、小笠原。この島の植物たちは、みな偶然海の向こうのどこから島にたどり着きました。たどり着いた最初はごくわずか。そして、生き残ることができた植物たちは、元々いた場所でのすがた・かたちから少しずつ変化し、小笠原の固有種へと進化してきたのでしょうか。さらに、島の中で様々な環境へ進出し、複数の種に分かれていくものもしばしば存在します。「島」という環境は、生物の進化を突き詰めていくのに絶好の場所なのです。



調査地の小笠原諸島父島

こぶのきのひみつ

シマホルトノキは小笠原だけにしか見られない樹木で、島では「こぶのき」の愛称で親しまれています。湿ったところから乾いたところまで幅広い環境に生育しています。このシマホルトノキの葉を島中から集めて、DNA解析をしたところ、なんと！シマホルトノキの中に2つのグループがあることが分かりました。それらは片一方が乾燥した地域に分布し、もう一方が湿った地域に分布しています。これら2つのグループは、外見からは区別が付きません。DNAを調べることによって、初めて2つのグループの存在が明らかになりました。この情報を元に再び野外に出てみると、なんと！2つのグループは花が咲く時期がずれていたのです。この2つのグループがいつの日か別々の種となる時はおとずれるのでしょうか？



こぶのきと呼ばれるゆえん

見えないけれど、見えてくるもの

生物がもっているDNAを調べることで、野外で観察しているだけでは気がつかない点が明らかになることがあります。そして、そこで新たに分かったことから新しい視点をもって、また野外に戻ってみると、ぐっと面白い世界が見えてくるのです。



頭上高くでひっそりと咲く湿性グループの花

光合成生物が作り出す有用物質を科学する



石川 孝博 教授

キーワード

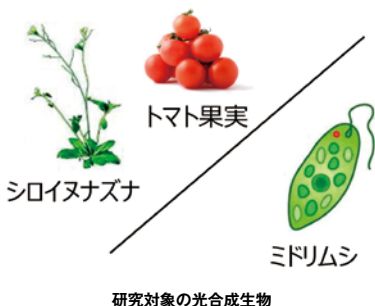
植物、ミドリムシ、ビタミンC、バイオ燃料、遺伝子

2 前線をゼロに



光合成生物は有用物質の宝庫！

植物や藻を含めた光合成生物は、私たちヒトにとって必要なビタミンやバイオ燃料になる脂質などたくさんの有用物質を作り出す能力を持っています。こうした有用物質が光合成生物の細胞内でどのように合成され、その量をどのように調節しているのか詳細なメカニズムを理解することは、将来これらの物質を役立てるうえでとても大切なことです。

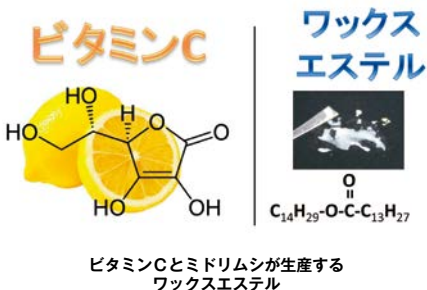


なぜ光合成生物は有用物質をたくさん作っているの？

現在私たちは、数ある有用物質の中でも特にビタミンCやワックスエステルと呼ばれる脂質に注目して、モデル植物のシロイヌナズナやトマト、微細藻類のユーグレナ（和名：ミドリムシ）を対象に研究を進めています。これまでに、これらの生合成経路や調節機構に関して、遺伝子や酵素タンパク質レベルで解析することで、「植物がどうやってビタミンCをつくっているのか?」、「なぜ果実にはビタミンCが多いのか?」、「なぜ光でビタミンCが増えるのか?」、「ミドリムシはどうやってワックスエステルをつくっているのか?」といった数々の疑問を解決しつつあります。

次々に湧き起こる疑問

上記の疑問の解決は通常、なかなか一筋縄ではいきません。当初の予想とは違っていたり、一つの問題が解決したかと思うと、また新たな別の疑問点が次々に湧き起こってきます。試行錯誤の繰返しの中から少しずつ垣間見えてくる生命現象の奥深さに興味は尽きません。



安全で環境に優しい農薬で害虫と闘う



塩月 孝博 教授

キーワード

植物保護、殺虫剤、抵抗性害虫、昆虫の脱皮・変態

2 飢餓をゼロに



害虫との闘いは終わらない？

作物をおいしく食べるのは人間だけではありません。穀物、野菜、果物を好む昆虫もいて、生産を妨げる場合は害虫と呼ばれます。その害虫による被害を防ぐため、いろいろな技術が用いられていますが、安定生産のためには必要最小限の農薬使用は欠かせません。同じ種類の殺虫剤を使い続けると効きにくくなり、抵抗性の害虫が出てきます。それが繰り返されるので、害虫との闘いに終わりはありません。



図1 チョウ目害虫の一種のチャハマキ

農薬は進化を続けている！

家電品や医薬品と同じように農薬も進化していて、人畜に対する毒性やミツバチなど環境影響が小さいものに置き換わり、使う量も少なくてすむようになりました。

殺虫剤に抵抗性を示す害虫の出現は避けられず、新たな作用を持つ農薬開発が必要になるため、害虫で標的になりそうなタンパク質や遺伝子を分析しています。また、害虫による被害を防ぐには、殺すのではなく成長を抑えたらよいので、脱皮・変態の仕組みについても調べています。

さらに、それを調節する昆虫ホルモンの作用に関わるタンパク質の機能を阻害する物質を新しい農薬の候補として探しています。



図2 幼若ホルモンが結合したタンパク質の立体構造。

生物は環境に適応する能力がある

昆虫の幼虫は、植物の葉を食べるものが多いです。植物中にはアルカロイドなど毒性の高い物質が含まれていることも多いため、それらに対する適応力を持っています。それらを解毒するため、特に様々な植物を餌とするチョウ目昆虫は分解酵素遺伝子をたくさん持っていて、殺虫剤も分解できることが抵抗性を示す一因と考えられています。そこで、抵抗性が起こる仕組みを明らかにすることで、その発達を防ぐ方法を探り、対抗する技術を確立することを皆さんと目指したいと考えています。

<https://www.ipc.shimane-u.ac.jp/chem-bio/>



活性酸素は敵か、味方か： 植物の環境応答とのかかわり



丸田 隆典 教授

キーワード

植物、ストレス、活性酸素、
ビタミンC、分子育種

2 創縁を
ゼロに



適度なストレスは植物を強くする？

現代はストレス社会。みんな大小何かしらのストレスを抱えて暮らしています。でも、あのストレス（苦難）を乗り越えたからこそ成長できた！ そんな経験もありますよね？ 実は同じような現象が植物でも見られます。動けない植物にとってのストレスとは、環境の変化です。光や温度、水分などの環境要因は絶えず変化し、植物を苦しめます。しかし、一度ストレスに耐えた経験のある植物は、もっと強烈なストレスにも耐えられるようになります。どうやって？ その鍵を握っているのが活性酸素です。

「毒」にも「薬」にもなる活性酸素のはたらきと調節

活性酸素とは、反応性の高い（＝酸化力の強い）状態に変化した酸素分子種です。環境ストレス下の植物では、代謝の攪乱によって活性酸素がたくさん生成されます。その量が多すぎると細胞が酸化・傷つけられ、植物は枯れてしまいます。一方で、適度な量の活性酸素は植物に危険を知らせる「信号」として機能し、防御遺伝子のはたらきを活性化します。一度ストレスを受けた植物が強くなるのは活性酸素のおかげなのです。このように、活性酸素は植物にとって「毒」にも「薬」にもなるため、そのバランスを厳密に調節する必要があります（図1）。それを分子レベルで解明するのが私の研究テーマです。

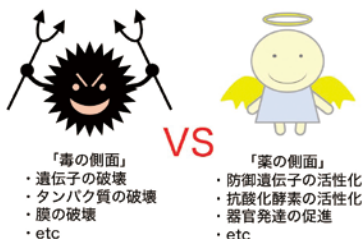
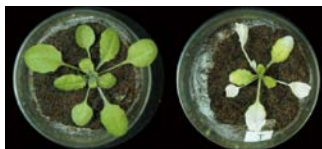


図1 活性酸素は毒と薬の二面性をもつ

ストレスに強い作物の育種へ

もし、活性酸素の「毒」としての作用をできるだけ排除しつつ、「薬」としての作用を高めることができれば、過酷な環境でも育つスーパー植物を作れるはず！ この目的のためにさまざまな研究に取り組んでいます。活性酸素の毒性を排除するための主役の一つはビタミンCです。これまでに、ビタミンC欠乏株などの「活性酸素を上手く扱えない変異株」を作出して（図2）、活性酸素の作用機序を分子レベルで解明してきました。とても基本的な部分を研究しているにも関わらず、まだまだ謎だらけです。ぜひ、一緒に研究しましょう！



強光ストレス（48時間）

図2 研究に用いるモデル植物シロイヌナズナ。左は野生株。右は活性酸素がたまりやすい変異株。



生命のきらめきを視よう —ラマン分光法—



山本 達之 教授

キーワード

生命、ラマン分光法、生きた細胞、分子、可視化

2 細胞をゼロに



ラマン分光法

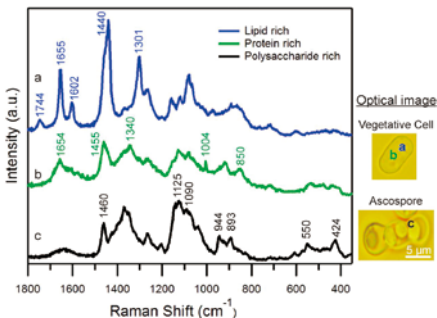
インドの科学者、C.V.ラマンは、1928年に新しい光散乱現象を発見しました。そしてその発見からわずか2年後には、ノーベル物理学賞が贈られました。この光散乱現象は、今では発見者の名前をとって、ラマン散乱と呼ばれています。ラマン散乱は、物質を構成する分子と光がエネルギーをやりとりする現象で、散乱される光には、分子の情報がたくさん含まれています。ラマン散乱光を利用して、分子の性質を調べる方法がラマン分光法です。



ラマンの業績を讃えた
インドの切手

生命のきらめきを視よう

ラマン散乱光の測定には、染色などの特別の準備は必要無く、あるがままに測定することができます。しかも、生きた細胞や組織を傷つけることもありません。このため、顕微鏡を利用してラマン散乱光を測定すると、生きた細胞や組織を生かしたまま、それらを形作る分子の性質を調べることができます。つまり、生命が生きて活動するために活躍する、いろいろな分子のきらめくような活動を視ることができます。

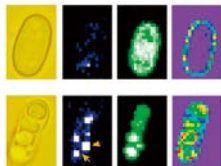


分裂酵母という細胞のいろいろな位置で測定されたラマン散乱光

生命が生きて活動するために活躍する、いろいろな分子のきらめくような活動を視ることができます。

細胞内で働くいろいろな分子を可視化する

顕微鏡を利用すると、生きた細胞や組織の異なる位置毎に区別してラマン散乱光を測定することができます。右の図は、異なる分子毎の特徴的なラマン散乱光を、強度に応じて色を変えて表示したイメージング写真です。こうすると、細胞のどこに、どんな分子がどのくらい存在するのか分かります。この技術をラマンイメージング法といいます。私たちは、この方法を使って、生命のきらめき、活動する様子を調べています。



分裂酵母の顕微鏡写真と、
いろいろな分子の
ラマンイメージング

分子同士の相互作用を食品に応用すると、健康増進につながるかも!!



吉清 恵介 教授

キーワード

エゴマ、分子カプセル、食品、健康、分子認識

2 煎餅をゼロに



オメガ3脂肪酸に富むエゴマ油は体にいいけど、どうやって食べるの？

健康に良いことで有名なオメガ3脂肪酸は、鰹や鯖に多く含まれるDHAとEPA以外にも存在し、その一つが植物に含まれる α -リノレン酸です。一年草の「エゴマ」の種から採れるエゴマ油は、約6割が α -リノレン酸から構成されるため、植物性オメガ3脂肪酸として注目されています。

ただしエゴマ油は、そのままでは熱安定性が低いため、加熱調理を嫌います。また、液体の油ですので、蕎麦粉やパン粉に混ぜる事も難しく、仮に出来たとしても食感が大きく変わってしまいます。我々は、分子間に働く弱い相互作用を利用して、この問題を解決しました。

分子カプセルに油を閉じ込め、それを食品に

エゴマ油のより使いやすい形態を目指して、シクロデキストリン(図1)と

と呼ばれるカプセルの中に、エゴマ油を構成する脂肪酸を部分的に閉じ込めました。その結果、図2に示すような白い粉末になりました。これにより、色々な食べ物の製造工程の途中で添加可能な形となり、さらに体内吸収性、熱安定性も向上しました。

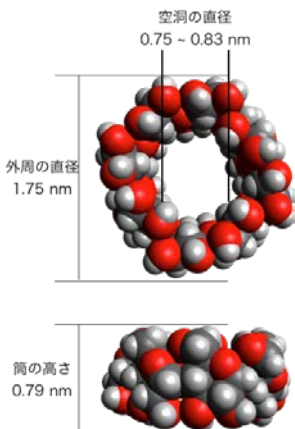


図1 α -シクロデキストリンを回転対称軸に沿って上、及び横から見た図



図2 シクロデキストリンを用いて粉末化したエゴマ油

島根大学発ベンチャー企業で商品化

分子同士の相互作用を理解し、それを食品分野に応用することで、多くの人の健康に貢献できるかもしれません。このように、大学では基礎研究の成果の応用も多く実施しています。現在は、島根大学発のベンチャー企業で、エゴマ油パウダーの商品化に取り組んでいます。

殺虫剤の作用部位の研究が 農作物の安定した供給に貢献!?



池田 泉 准教授

キーワード

昆虫、薬物受容体、神経伝達物質、
分子設計・有機合成、生物有機化学

2 飢餓を
ゼロに



世界規模の食糧不足を解消する農作物の安定した供給とは？

日本では少子高齢化が問題視されていますが、地球全体では人口が増加傾向にあり、それにとまって近い将来に世界規模の食糧不足になることが心配されています。十分な食糧を確保するために、農作物の安定した供給は欠かせません。病害虫などの被害から農作物を守りさらに生産量を高めるために、現状では殺虫剤など農薬の役割は重要です。現在日本で使用されている農薬は、農作物が消費者のもとに届くときにはほとんど残らないように開発されています。農薬に抵抗性のある病害虫の発生も問題となっていて、それを軽減する農薬の開発も望まれています。

殺虫剤の標的としての神経のニコチン性アセチルコリン受容体

農作物の害虫を駆除するための殺虫剤の標的として昆虫ニコチン性アセチルコリン受容体 (nAChR) などの神経伝達物質受容体があります (図1)。神経のnAChRに作用する薬物には様々なものが知られていて、作用の様式により作動薬や拮抗薬等に分類されます (図2)。昆虫nAChRにおける薬物の結合部位の詳細を解明するため、これらのさまざまな作動薬あるいは拮抗薬の類縁体を有機化学的に合成し、その類縁体の化学構造と標的の受容体における生物活性の相関について研究しています。

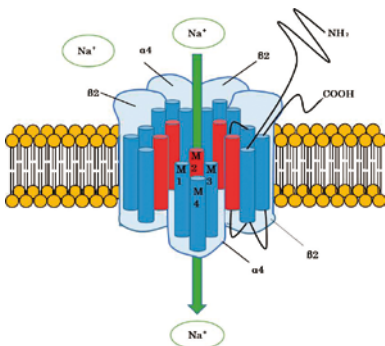


図1 神経のニコチン性アセチルコリン受容体の構造

より効果的で安全性の高い新規薬剤の開発を目指して

神経伝達物質受容体を標的とした新規化合物を合成し、病害虫に特異的に作用する受容体の薬物結合部位の詳細を解明する研究を行っています。

このような研究を行うことにより、より安全性の高く効果的な新規薬剤の開発につながる事が期待されます。

みなさんも私たちとともに研究に参加して、新しい知見を見出す楽しみややりがいを共有しませんか!?

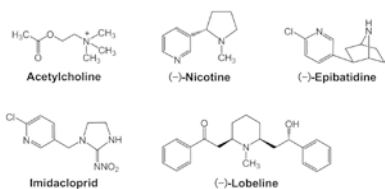


図2 神経のニコチン性アセチルコリン受容体に作用する薬物

ビタミンBってそんなに大事なの？



小川 貴央 准教授

キーワード

植物、遺伝子、タンパク質、補酵素、環境ストレス

2 煎餅をゼロに



ビタミンBとは

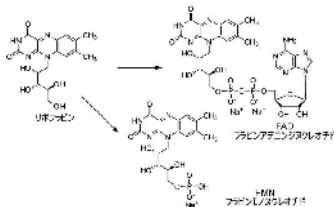
ビタミンBは、水溶性のビタミンのうち、ビタミンB₁、B₂、ナイアシンなど8種類あり、それらをまとめてビタミンB群と呼びます。これらはいずれも生体内で、酵素タンパク質が働くために必要な補酵素として機能しています。これらの中で、ビタミンB₂であるリボフラビンとナイアシンは、生体内でそのほとんどがFADやNADHなどの補酵素型として存在します。これらの補酵素は、数百種類もの酵素反応や呼吸、光合成にも必須であることから、すべての生物にとって重要なものであることがわかります。

重要なものなのに分解しないといけない？

私が大学生の時の卒業研究のテーマは、モデル植物であるシロイヌナズナから環境ストレス耐性に関係する遺伝子を探すということでした。苦勞の甲斐あってある遺伝子が植物の環境ストレス耐性に関



実験材料のシロイヌナズナ



与することがわかり、その遺伝子について詳細に調べていくと、この遺伝子から作られるタンパク質は、NADHやFADなどの補酵素を分解する働きがあることがわかりました。これは、補酵素が植物の生存にとって必要なものであるにもかかわらず、ある環境下においてはそれらを分解しなければならないということの意味しています。そこで、NADHやFADといった生物の教科書に当たり前のようになっている基本的な化合物が、生体内でどのように調節されているか、ほとんど理解されていないことに気づきました。



ビタミンB₂ (上)、
液体クロマトグラフィー (下)

植物の補酵素の調節機構を明らかにする

そこで私は、植物における補酵素の合成・分解がどのように調節されているのか、またそれらが環境ストレス応答などにどのように関与しているのかを明らかにしていきたいと考えています。

研究室ホームページ <https://shimane-univ-biochemistry.jp/>



病気の新しい早期診断技術 開発を!!



ヌータパティヘマンズ 准教授

キーワード

ラマン分光法、早期診断、分子、ガン、AI、機械学習

3 すべての人に
健康と福祉を



病気の新しい早期診断技術が必要

世界では、30~70歳の間に1,500万人以上が非感染性疾患(NCD)で死亡しています。これらのうち、およそ85%は低中所得国で発生しています。NCDは、特に貧困家庭に大きな経済的負担をもたらし、社会を混乱させます。このため、これらの病気の早期診断のための新しい技術の

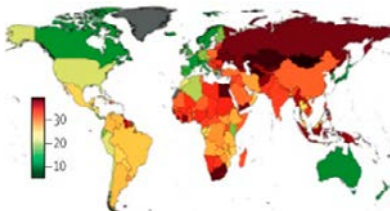


図1 30~70歳の間にNCDが原因で死亡する確率(%)。赤は高高確率、緑は低確率を表す。[出典 Lancet 2018; 392:1072-88]

の開発が急務となっています。私は、この問題に対処するために、「ラマン分光法」と呼ばれる手法を用いた癌の早期診断のための新技术を開発し、人工知能を最大限に活用して迅速かつ確実な診断を行うことを目指しています。

ラマン分光法とは何か？

病気の診断には、分子マーカー(病気の目印となる分子)の特定が必要です。試料中に、分子マーカーが見つければ、病気の早期診断が可能です。ラマン分光法を使用すると、細胞、組織、血液などのさまざまな生体試料中の“分子の指紋”とも呼ばれるラマンスペクトルを、分子毎に、あるがままに測定できます。顕微鏡とラマン分光法を組み合わせると、生体試料中の種々の分子の分布を表すラマンイメージが測定できます。



図2 私の研究の進め方の概念図

私が目指す研究

私は、人工知能(AI)を使用して、ラマンイメージデータを分析する技術開発をしています。このやり方で、私は患者に負担の少ない、早期診断技術を開発できると考えています。私は、私の出身地であるインドの病院と共同研究しています。低中所得国の病気の早期診断にも役立つ技術開発を、私と一緒にしてみましょう。

健康促進と病態発症の分岐点を腸内の化合物から解き明かす



清水 英寿 教授

キーワード

腸内環境、腸内細菌代謝産物、タンパク質、生活習慣病、病態発症予防

3 すべての人に健康と福祉を



お肉をたくさん食べること

以前から、特にシニア世代の高食肉摂取は、寿命の延長が導かれることが明らかとなっています。さらに最近では、肥満改善に対しても高食肉摂取が推奨されています。しかし一方で、特に赤身肉

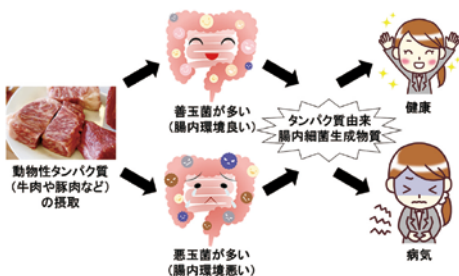


研究に用いる代表的な実験材料
(左：大腸ガンの培養細胞・右：ラット)

の多量摂取は、炎症性腸疾患(クローン病・潰瘍性大腸炎)や大腸ガンの代表的な発症・進展要因と報告されています。以上のように、高食肉摂取の相反する効果が疫学的な調査から実証されていますが、どのようなメカニズムで、このような真逆の効果が発揮されるのか、未だ明らかとなっていないのが現状です。

腸内でお肉はどのように変化して身体に影響を与えているのか？

私たちは、食べたお肉(タンパク質)から腸内細菌が作り出す化合物の量に個人差があり、それが高食肉摂取に対して相反する効果を導いていると予想しています。特に私たちが注目している化合物は、高食肉摂



食べたタンパク質を元にして腸内細菌が作り出す化合物が健康増進や病態発症・進展に与える予想メカニズム

取した時のみ腸内で産生される化合物と、その化合物を腸内細菌が作り出すために材料としているもう1つの化合物です。食べたお肉をスタートに、腸内細菌が作り出すこれら2つの化合物が、健康促進と病態発症の分岐点になると仮説を立て研究を進めています。

腸内細菌が作る化合物から健康寿命を考える

高齢化社会を迎える我が国において、健康寿命と言われる「日常生活に支障のない期間」を延長させることは、「生活の質(Quality of Life: QOL)」の維持・向上に非常に重要です。そのため、私たちが得た研究成果を健康寿命の延長へと繋げ、シニア世代のQOL向上に貢献できたらと考えています。腸内細菌が作り出す化合物が健康や病気に与える作用メカニズムは、まだまだ謎だらけです。これから皆さんと一緒に、その謎を解き明かしていけるのを楽しみにしております。

酵母を使って ヒトの病気を解明する



松尾 安浩 教授

キーワード

分裂酵母、シグナル伝達、細胞周期、ストレス応答、グルコース飢餓

3 すべての人に
健康と福祉を

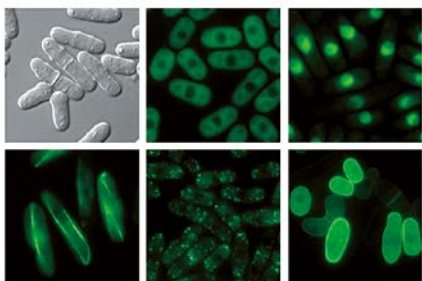


酵母はヒトと同じ真核生物である

分裂酵母は、直径が4 μ m、長さが約13 μ mと小さく、顕微鏡で見ることができる微生物です。しかし、分裂酵母は、ヒトと同じ真核生物であり、同じ細胞内システム(細胞周期、シグナル伝達経路、タンパク質分解経路など)を持っています。また、染色体が3本と少なく、ほとんどのシステムが単純化されており、細胞分裂(1つの細胞が2つに分裂するまで)が約3時間と短いです。そのため、分裂酵母を研究することで、ヒトの事を迅速に理解する事ができます。

グルコースに応答するシグナル伝達経路

分裂酵母はグルコースを炭素源として、生きています。そのため、培地中のグルコース濃度が、生育するために重要です。グルコース濃度が高い時(3%)、細胞は増殖を繰り返していきます。一方、グルコース濃度が低い時(0.1%)、細胞の増殖が遅くなります。このように環境のグルコースによって細胞の増殖を変化させており、この応答には、cAMP(サイクリックAMP)/プロテインキナーゼA(PKA)経路が関与しています。グルコースの飢餓状態(0.1%グルコース)ではPKA経路が不活性化します。そのため、PKA経路を解析することは、グルコース飢餓状態で細胞がどのように応答しているのかを理解する事ができます。

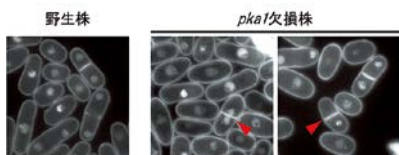


研究で使用している分裂酵母

細胞形態(左上)、GFPを用いたタンパク質の細胞質局在(中央上)、核局在(右上)、微小管局在(左下)、アクチン局在(中央下)、細胞膜局在(右下)

グルコース応答経路による細胞周期制御を理解する

細胞はストレスなどが存在するとその環境下で生存するように細胞内で制御が起こります。PKA経路の機能欠損株(*pka1*欠損株)は、薬剤が存在すると染色体分配が異常になった細胞が見られます。これは、ヒトではダウン症候群などの病気として知られており、PKA経路がこの病気に関与することが考えられます。そのため、グルコース応答経路(cAMP/PKA経路)がどのように病気に関係しているのかを研究しています。この研究によって、グルコース飢餓状態での病気との関連性を解明しようとしています。



PKA経路の不活性化による染色体分配の異常

PKA経路の機能欠損株(*pka1*欠損株)は、薬剤が存在すると染色体分配異常の細胞(赤矢印)がみられる。

酵母を使った バイオテクノロジー



戒能 智宏 准教授

キーワード

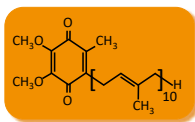
コエンザイムQ₁₀ (CoQ₁₀)、
遺伝子、分裂酵母、抗酸化、
バイオテクノロジー

3 すべての人に
健康と福祉を



あなたの細胞でもコエンザイムQ₁₀ (CoQ₁₀) が合成されている

ドラッグストアなどで、「CoQ₁₀」の文字をみたことがありますか？ コエンザイムQ₁₀ (CoQ₁₀、「コキューテン」といいます) は、サプリメントとして



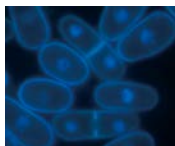
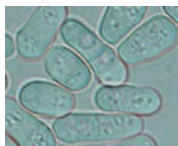
CoQ₁₀ (酸化型コエンザイムQ₁₀)



有名になりましたが、多くの生物はコエンザイムQ (CoQ) を、細胞の中で合成することが出来るのです (「10」の数字は側鎖の長さで、生物によって異なります)。CoQは、真核生物では主にミトコンドリアで合成され、電子伝達系でのATP合成に働く物質で、細胞の酸化を抑制する機能もありますが、加齢に伴い細胞内のCoQ量は減少するといわれています。

コエンザイムQは、様々な機能を持つ

私たちは、*S. pombe*という分裂酵母を使って、細胞内でのCoQ₁₀の合成経路や機能を調べています。バイオテクノロジーの技術を使って、CoQ合成酵素遺伝子を破壊すると、CoQ₁₀を合成できなくなった分裂酵母は、呼吸によるエネルギー生産が出来ない(呼吸欠損)、栄養の少ない培地で生育が遅くなる(生育遅延)、酸化ストレスに弱くなる(酸化ストレス感受性)、硫化水素を発生するなどの、多くの性質(表現型)を示します。これは、CoQがそれらの機能に関係していることの現れです。



分裂酵母 (*S. pombe*) の顕微鏡写真(左)と、核染色した分裂酵母(右)

最少培地

野生株
CoQ欠損株



分裂酵母CoQ欠損株は、最少培地で生育が遅延する

まだわかっていないことが多いCoQの合成と機能

私たちはCoQの機能を調べるために、もともとCoQ₁₀を極微量しか持たないという変わった特徴を持つ分裂酵母*S. japonicus*の研究もしています。また、CoQ合成酵素遺伝子に変異が入り、CoQ₁₀量が減少している疾患が報告されています。CoQに関する基礎研究は、ヒトの疾患原因の解明への貢献と治療法の開発、大量生産技術の開発、サプリメントの効果的な摂取方法など、幅広く人の生活の質の向上にも役立つことが期待できます。

乳酸菌で雲州人参を パワーアップする



地阪 光生 准教授

キーワード

乳酸菌、雲州人参、ジンセノシド、 β -グルコシダーゼ

3 すべての人に
健康と福祉を



雲州人参について

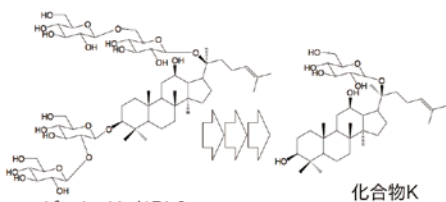
雲州人参（高麗人参）は、滋養強壮、体調調整、自律神経調整などの幅広い生理機能を持つ上級の生薬として昔から使われています。日本では江戸時代に高麗人参の栽培が始まりましたが、現在でも続いている場所はごくわずかで、島根県（大根島）は貴重な栽培地の一つです。大根島産の高麗人参は品質が良く、「雲州人参」という銘柄で知られています。雲州人参の栽培は、栽培に6年、収穫後の土作りに10年など、非常に長い時間を要します。そのため、栽培技術の改良とともに、より有効な活用方法の開拓が、雲州人参産業の発展には必要です。



雲州人参の6年根

雲州人参の有効成分について

雲州人参の有効成分は、コレステロールに似た物質とブドウ糖などの糖が結合したもので、ジンセノシドといいます。植物体に含まれるジンセノシド自体の生理作用は実はあまり



ジンセノシドの糖を切り離す反応

強くなく、ジンセノシドの糖が胃腸内の消化で除かれると、より強い効能を発揮します。つまり、消化力が違えば効能も変わります。ならば、ジンセノシドの糖を予め除いておけば、誰にでも強い効能が期待できます。そこで、糖を除去するために、乳酸菌の β -グルコシダーゼという酵素の活用を研究しています。

β -グルコシダーゼ活性の強い乳酸菌を見つけた

私たちが共同研究している島根県産業技術センターは、島根県のような食資源からいろいろな乳酸菌を分離しています。私たちは、同センターが持つ約100株の乳酸菌の中から、約20株の強い β -グルコシダーゼ活性を持つ乳酸菌を見つかることができました。また、一方で、酵素の性質が株により異なることも見出しています。今後は、ジンセノシドをパワーアップできる乳酸菌を絞り込むとともに、性質の異なる酵素をうまく活用し、雲州人参の効果的な機能強化法を開拓していきます。

酵素活性を持つ株

酵素活性を持たない株



酵素活性の検出

酵素が働くと反応液が黄色く着色する。

蛍光バイオイメージングで細胞内のタンパク質の動きを調べる



西村 浩二 准教授

キーワード

緑色蛍光タンパク質GFP、蛍光バイオイメージング、植物貯蔵タンパク質、食糧機能増強、バイオテクノロジー

2 煎餅をゼロに



私達は日頃から植物の貯蔵物質を食べて成長します

私達は、お米、野菜、果物といった農作物を食べて元気な毎日を過ごしています。農作物に含まれる栄養分は植物の中で作られ、貯蔵されたものです。例えば大豆は栄養豊富ですが、その多くは植物の液胞とよばれる場所に蓄積された貯蔵物質で、私たちはそれを食べて暮らしています。私は植物の中で貯蔵物質が作られ、蓄積する仕組みに興味があり、モデル植物であるシロイヌナズナや、ぜんざい発祥の地である島根県と古来より縁（ゆかり）が深いアズキなどを研究材料(図1)としています。



図1 研究している植物

アズキ(左)、シロイヌナズナ(右)、タマネギなどです。

貯蔵タンパク質の運び屋の働きを調べます

植物の種子中の貯蔵タンパク質が蓄積する仕組みを理解するためには、その運び屋の働く仕組みを調べる必要があります。研究対象のタンパク質が植物の中でどのような動きをするかを調べるには、ノーベル賞で有名になった光るタンパク質、緑色蛍光タンパク質「GFP」を使うと、蛍光顕微鏡を使って観察することができます。このような技術を「蛍光バイオイメージング」と言います。研究の結果、運び屋タンパク質の特定の部分がおかしくなると、植物の中にある様子が全く変わることがわかりました。このとき貯蔵タンパク質は正しく植物の中に蓄積できないことも別の実験でわかりました(図2)。このようにして私は、蛍光バイオイメージングを使って、貯蔵タンパク質が運ばれて、蓄積する仕組みを調べています。

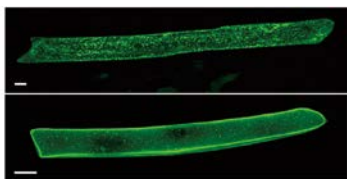


図2 植物の中のタンパク質の様子

共焦点レーザー蛍光顕微鏡(図3)を使って、光るタンパク質の様子を観察しました。下図は、上図の光るタンパク質の一部を変更したものです。細胞の中の様子が全く変わりました。



図3 共焦点レーザー蛍光顕微鏡

特別な蛍光顕微鏡を使って、植物や動物の体の中で光るタンパク質が動く様子を観察します。

タンパク質の動きを調べることで、健康のためによりよい農作物を作りたい!

みなさんも、「蛍光バイオイメージング」という技術を使って、私と一緒に植物の中でタンパク質が運ばれる仕組みを理解して、健康で、より良い農作物を作ってみませんか?

農林生産学科は、農林業生産による豊かな人間生活の実現を目指して、農産物及び林産物に関する持続可能な生産技術と経営・経済について教育と研究を行なっています。農林業とそれを取り巻く生態系、地域社会について総合的に学ぶことができます。

Department of Agricultural and Forest Sciences

資源作物・畜産学 コース

イネ、タイズ、サツマイモなどの作物及び肉用牛、乳用牛、羊などの生産動物を主な材料とし、資源作物及び動物の生理・機能性、持続可能で効率的に農畜産物を生産するための知識と技術を学び、作物生産や畜産分野で活躍する技能を有した人材を育成します。

園芸植物科学 コース

ダイコン、トマト、ツツジ、サクラ、ブドウ、カキなどの野菜、花卉、果樹を主な材料とし、これらの効率的な生産及び利用における高付加価値化に関する知識と理解を深めることで、園芸植物の生産や利用の分野で活躍する技能を有した人材を育成します。

農業経済学 コース

食の安全性、消費者行動、六次産業化、農業や農村の担い手確保、農業経営、地域活性化、途上国の貧困など食料、農業、農村に関する諸事象を総合的に理解し、社会科学の視点から独自に考察・提案できる能力を備え、地域社会の創造に貢献できる人材を育成します。

森林学 コース

森林資源の育成・管理、モニタリング、森林政策、木材生産、エネルギー利用を中心に、森林・林業に関する総合的な知識を身に付け、知識や社会の要請に応じて中山間地域の振興から地球環境問題まで、幅広い問題を解決する能力を備えた人材を育成します。

農 林 生 産 学 科

キー
ワード

農業、畜産、園芸、林業、農業経済、農業経営、
地域活性化、六次産業化、環境問題

知夫里島での肉用牛生産を 考える



一戸 俊義 教授

キーワード

肉用牛、周年放牧、エネルギー代謝、
窒素代謝、環境保全

9 産業と技術革新の
基盤をつくらう



研究背景

ウシ、ヒツジ、ヤギ、トナカイ、ラクダなどの反すう家畜は、反すう胃という特殊な消化器官をもっています。ブタやニワトリとは違い、反すう家畜はヒトが食糧として利用できない草本類やワラなどを基礎飼料とし、肉・乳・子・毛などを生産します。反すう家畜の飼いかたは、舎飼いと放牧に分けられます。舎飼いは精密な栄養管理が可能ですが、大規模な牛舎建設と高栄養価の飼料調製が必要となります(図1)。放牧飼養は草地を利用した土地生産型の飼養方式で、近年の飼料価格高騰を背景に、わが国では最近、その価値が見直されています。草地に生育する牧草の量と栄養素含量は季節によって変化するため、それに応じた栄養管理と草地管理技術が求められます。

島根県知夫村での放牧牛の研究

島根県隠岐郡は2013年に隠岐ユネスコ世界ジオパークに認定されました。隠岐郡島前の知夫村では、黒毛和種の母牛が1年中公共牧場で放牧され、生まれた子牛は全国に出荷されます。この様な和牛の飼いかたは全国でも珍しく、島根県島嶼域の特徴的な生産システムといえます。

知夫村役場および知夫村の肉用牛農家に協力いただき、現在、知夫村独自の和牛飼養管理マニュアルの作成を行っています。母牛と子牛は放牧主体で飼われますが、草の量が著しく減少する冬期は補給飼料の給与が必要となります。栄養価の高い牧草が生育する春-秋期(図2)、牧草が枯渇する冬期(図3)の牧草栄養価の継続調査と、放牧時の草地移動と食草によって消費されるエネルギーを調査するため、各種センサーを牛の頭部に取付けて24時間の行動データを収集し、放牧地の草量と外部環境との関係について西日本農研センター(島根県大田市)と共同で解析を進めています。

今後の展望

知夫村の牛頭数が増えると、草地に排泄された糞尿による環境汚染が危惧されます。持続可能な島根県島嶼域での和牛生産システムを確立するため、土壌、地下水、河川水が窒素汚染されていないか、環境面の調査を計画しています。



図1 企業的な舎飼い肥育(出雲市)



図2 知夫村の放牧和牛(9月)

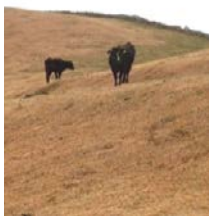


図3 知夫村の放牧和牛(12月)

キノアの国産化へ向けた試み



氏家 和広 准教授

キーワード

雑穀、キノア(キヌア)、作物学、栽培、育種

2 飢餓をゼロに



注目のスーパー雑穀？「キノア」

キノア(キヌア)は南米アンデス地方を原産とする雑穀です。一般的な穀物はイネ科ですが、キノアは双子葉植物のヒユ科(アカザ亜科)に属します。カリウムやカルシウムといったミネラルを多く含み、抗酸化作用や血中コレステロール低下作用を持つとされ、機能的食品、健康食品素材として世界中の注目を集めています。



図1 茹でキノアのサラダ

キノア国産化への挑戦

最近、スーパーなどでもキノアを販売しているところが多くなりました。しかし、それらの商品はほぼ全てペルーやボリビアからの輸入品です。私は、この優れた穀物を国産化したいと考え、栽培方法に関する研究を進めています。日本とアンデス地方では気候が大きく違いますから、同じように栽培しても上手くはいきません。例えば、アンデス地方では、 1m^2 の土地あたりに1~数株程度のキノアを栽培します。これには栽培地の降水量が少なく、あまりたくさんのキノアを育てると、成長に必要な水が不足してしまうことが原因の1つです。日本で栽培する場合には、水不足の心配はありませんので、もっと多くのキノアを栽培できます(1m^2 に100株以上)。むしろ、キノアは過剰な水分に弱いため、水はけの良い畑で栽培するなど、湿害対策が求められます。

新品種の育成

イネには「コシヒカリ」や「つや姫」といった品種がたくさんありますが、キノアでも同じように多くの品種があります。私は日本の気候条件に適した新品種の育成にも取り組んでいます。狭い土地に多くの株を栽培できるように分枝が少なく、台風でも倒れないように背は低く、収穫物がたくさん得られるだけでなく品質も高い、そんな品種の育成を目指しています。



図2 様々な色彩に色づいた多様なキノア品種

夏の葉を見て秋のサツマイモの収穫量を予測する



門脇 正行 准教授

キーワード

サツマイモ、作物、植被率、生育診断、収穫量

2 画像をゼロに



秋に収穫できるサツマイモの量は予測できるか？

サツマイモは日本に伝わってから400年以上が経過し、古くより救荒作物として活躍するなど日本人の生活に密着した作物となっています。気候変動に強い作物とされてきましたが、近年の急激な高温や長期間の少雨では収穫量が不安定になることも見られるようになってきました。収穫量が不安定になる中、収穫量を決定する要因や時期がわかれば、安定させるための対策を考えることができます。そのため、まずはサツマイモの収穫量に関する要因や時期を簡単な方法で測定し収穫量を予測することを試んでいます。



画像解析で植被率を計測する様子

葉の写真を解析すれば、掘らなくても数ヶ月後の収穫量が予測できる

植え付け後約1ヶ月（生育初期）のサツマイモの葉を150cmの高さからデジタルカメラで撮影して、その画像を解析します。画像解析をすることでサツマイモの植被率（葉が地面を覆う割合）を求めることができます。生育初期の植被率と収量との間には非常に密接な関係性があることが確認され、植被率が高い（葉が地面を広く覆っている）と数ヶ月後の収穫量が高いことがわかりました。

予測することで良いことは……

サツマイモには焼き芋などに利用する青果用だけでなく、干し芋などの加工用、春雨や水飴の原料となるデンプン原料用、家畜のエサとなる飼料用、焼酎原料用および色素用など様々な用途があります。秋の収穫量を夏の時点で予測できると様々な用途での需要に対応することが可能です。

今後は植被率と収穫量との関係をより明らかにすることを目指していますが、植被率以外にも葉色など収穫量に影響する要因があると考えられるため、まだ実験すべきことは多く残されています。サツマイモに興味のある皆さん、サツマイモを安定的にたくさん収穫するために一緒に研究しませんか？



いろいろなサツマイモ

イネも早起きは三文の得—涼しいうちにイネを咲かせて高温を避ける



小林 和広 准教授

キーワード

イネ、農業、食用作物、地球温暖化、受精

13 気候変動に
具体的な対策を



地球温暖化は稲作にとっても一大事 朝早く開花すると高温を避けることができる

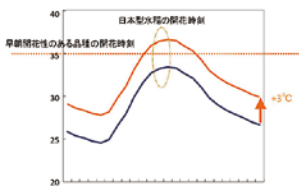
イネは日本だけでなく、アジアやアフリカの熱帯諸国にとっても大切な食用作物です。地球温暖化が食糧生産に深刻な問題を及ぼすと考えられています。イネで特に怖いのは受精時の異常な高温です。高温によって花粉が障害を受けて、受精に失敗するとお米ができません。イネは熱帯原産だから日本はだいじょうぶかという、2018年夏の異常高温で岐阜県などでは高温による被害が発生したという報告があります。このような高温障害を避ける方法の一つが花を朝早くの涼しいうちに咲かせる方法です。



イネ(左)とイネの花(右)

目覚ましとなる植物ホルモン(ジャスモン酸メチル)

イネの開花は1時間で終わります。日本で栽培されるイネの開花は午前10時から11時ごろです。右グラフの楕円で囲ったところがイネの開花時刻です。これをより涼しい左へと移動できれば高温を避けられます。品種改良によって遺伝的に早く咲くイネを作る方法もありますが、植物ホルモンの一種であるジャスモン酸メチルを散布することによって、1、2時間、早く咲かせることができました。



現在の盛夏における松江の気温は青い線のように1日で変化します。地球温暖化すると赤い線のようになります。35℃以上が危険域なので、何も対策しなければ楕円で囲った開花時間帯にイネが咲いてしまいます。

ジャスモン酸メチル散布には副作用が！ 実際に田んぼに出て実験してみよう

ジャスモン酸メチルは目覚ましホルモンでしたが、花粉が成熟しないうちの一部の花を咲かせてしまう副作用がありました。このような副作用が起きた理由を今後、明らかにする必要があります。さらに実際の稲作をやっている現場でこの技術が利用できないと意味がありませんので、日本だけでなくできれば海外でも研究を進めたいと思っていますので、一緒に研究してみませんか？

右のQRコードで教育、研究内容を紹介したホームページと研究紹介をしている動画(Youtube)に行くことができます。



ミャンマーでの実験した水田。実験室で達成できても現場で再現できるとは限りません。現場で確認することが大切です。



研究室ホームページ



研究紹介動画集

甘いサツマイモをつくるには



足立 文彦 助教

キーワード

作物、気象、サツマイモ、デンプン、糖

2 煎餅を
ゼロに



地球温暖化で焼き芋が甘くなくなった？

サツマイモは多用途で災害にも強いスーパー作物です。コンビニでも焼き芋が販売され需要が増えていますが、近年、糖度の低下が問題となっています。この原因として温暖化との関連が指摘されています。日本の平均気温は100年で約1.1℃の割合で上昇していますが、塊根肥大期にあたる8月の産地の気温上昇が大きく関係している可能性があります。

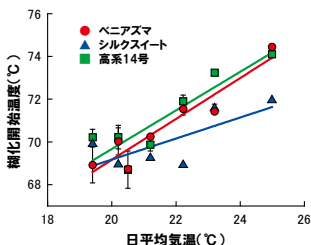


市場で人気を呼ぶ焼き芋
(べにはるか)

低温な場所で栽培すると甘くなる！

サツマイモは、蒸す、焼くなどの加熱調理をして食べます。これはサツマイモのデンプンをβアミラーゼ(酵素)により麦芽糖に糖化(分解)し、おいしくするためです。糖化にはデンプンが加熱され、のり状になる(糊化)必要があります。しかし、糊化温度は酵素が最も働く温度よりも高温なので、糊化温度が低下できれば、酵素がよく働くことで糖化が促進され甘くなります。

そこで、糖度に及ぼす温度の影響を調べるために標高が異なる地点でサツマイモを栽培し、気象条件との関係を解析すると、デンプンの糊化開始温度は栽培地の気温の低下にともなって低くなることがわかりました。すなわち、標高が高く低温な場所での栽培により甘くなるデンプン特性を持つサツマイモが生産できること、気温1℃の低下により糖度が1.24度高まることを明らかにできました。



栽培期間の日平均気温と糊化開始温度との関係

栽培温度によりデンプンの糊化開始温度が低下すると、酵素が最も働く温度条件に近づくために糖化が促進されて加熱調理後に甘くなりやすい

大きいサツマイモはおいしくない？

同じ場所で収穫したサツマイモでも、そのサイズにより甘さが違うようです。今後は、芋の着生・肥大を調査し、安定して甘いサツマイモが収穫できるよう皆さんと一緒にその条件を解明していきたいと考えています。また、温度条件によるデンプン特性の変化は、イネ、ムギ、ジャガイモなどのデンプン作物に共通した現象です。みなさんも作物の品質に及ぼす栽培条件の影響を研究してみませんか？



サツマイモの生育調査

共生窒素固定でマメ科作物の生産性向上を目指す!



城 惣吉 助教

キーワード

ダイズ、アズキ、根粒菌、共生窒素固定、遺伝子多様性

2 飢餓をゼロに



植物が利用できる窒素をつくる根粒菌

根粒菌は土壤に生息する細菌で、ダイズやアズキなどのマメ科植物の根に根粒という器官を形成し、共生窒素固定を行います(図1)。一般的な植物は大気中の窒素を利用することができませんが、マメ科植物はこの共生窒素固定により生育に利用可能な窒素を得ることができます。窒素は作物の生産量を左右する重要な栄養素の一つですが、窒素固定により多くの窒素を宿主に供給することができれば、マメ科作物の生産性向上に繋がると考えられています。しかし、宿主により多くの窒素を供給できる能力の高い根粒菌を利用した栽培技術の確立には至っていません。



図1 ダイズ根の根粒

根粒菌の能力を評価してみる

根粒菌の窒素固定能は種類により異なります。ダイズやアズキの生育促進や収量の増加に効果を示す根粒菌を探し出すために様々な地域の土壤から根粒菌を分離し、遺伝子多様性解析や分離菌株の接種効果の評価を行っています(図2)。



図2 分離した根粒菌のコロニー(左)とダイズへの接種試験(右)

根粒菌のチカラを利用した栽培技術は確立できるのか?

窒素固定能の高い根粒菌をダイズやアズキに接種することで、生育促進や収量増加に効果を示すことを明らかにしつつあります(図3)。しかし、根粒菌の接種効果は品種により異なる場合もあるようで、宿主と根粒菌の親和性についても調査する必要があると考えています。得られた研究結果は、根粒菌のチカラを利用した微生物資材の開発や新しい栽培技術の確立に繋がるのではないかと期待しています。

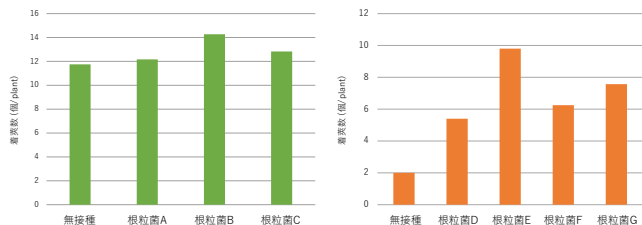


図3 窒素固定能の異なる根粒菌の接種がダイズ(左)やアズキ(右)の着莢数に及ぼす影響

私たち、細胞を食しています！



宋 相憲 助教

キーワード

反芻動物、培養細胞、体組織発達、細胞増殖、内分泌生理

2 飼料をゼロに



動物細胞の発達は、動物の体発達に直結します

私たちが食べている動物のお肉は、当たり前のことですが、細胞という生き物の基礎単位で構成されています。つまり、肉用動物の筋肉細胞と脂肪細胞を発達させることは、家畜生産効率向上に直結します。我が研究室では、ウシや、ヒツジなどの反芻動物を研究対象とし、これらの家畜の体を構成している様々な種類の細胞における成長、増殖および発達に関連する体外・体内因子を探索するとともに、細胞と細胞が何を媒介してお互いに影響し合うのかについて研究を行っています。

多様な細胞の培養技術を保有しています！

食肉を構成する細胞は、主に、筋細胞と脂肪細胞で構成されています。また、乳用牛の乳生産器官である乳房の中には、乳腺細胞が存在します。これらの細胞の成長・発達は、家畜に給与した飼料の栄養成分を利用すると共に、脳、肝臓、すい臓など、家畜体内に存在する様々な器官が分泌する生理調節物質により調節されることが知られています。本研究室では、ウシや、ヒツジ、さらに、メダカを由来とする種々の培養細胞を作成・保有しており、体内の各細胞における詳細な機能について研究可能な実験環境を構築しています。



反芻動物の未分化培養細胞



脂肪細胞 → サシ



筋細胞 → 赤身



骨細胞 → 骨格

培養未分化細胞の多分化能

細胞の運命制御技術を確認することにより家畜の生産効率の向上が可能となります。

骨のある研究？

近年、反芻動物から得られた未分化細胞が、筋細胞、脂肪細胞、神経細胞および骨細胞への分化能を有することを確認しました。特に、骨細胞が発達する際に、様々な物質を分泌することにより、筋細胞および脂肪細胞の栄養素取り込みを調節する可能性を確認しています。これまで、単なるカルシウムの固まりとして知られていた骨組織ですが、肉および牛乳生産において重要な役割を担う体細胞の調節器官である可能性が考えられます。



骨細管(矢印)を介し、生理調節物質を分泌する骨細胞

植物の形づくりの仕組みを調べて、新しい農作物を開発する



江角 智也 教授

キーワード

ブドウ、カキ、サクラ、アズキ

2 皿俵をゼロに



かたちから入る

花の形、花序の形、種子の形、葉の形、草の形。植物の各器官がそれぞれに特有の形をつくりながら成長することを“形態形成”といいます。植物の形態形成は多様であり、形態観察は種の進化や生態について様々な考え方を与えてくれます。さらに、その多様な形態が生じる仕組みや理由を解き明かしていくことは植物学の本流ともいえます。しかし、その研究を新しい農作物の開発にもつなげていこう！ということで、一石二鳥になる研究、つまり基礎研究と応用研究の二兎を追うのが農学のかたちです。

形態が違う原因を調べ、植物の形を変えてやろう

花の構造、花序形態のでき方、種子の形、果実の形成について、顕微鏡観察や遺伝子発現解析などを駆使して調べています。島根県の特産果樹をはじめ、附属農場で160品種・系統ものの種類を栽培しているサクラ、出雲で産地化を進めているアズキなど、幅広い植物種が研究対象です。花や花序の形づくりの解明から、ブドウの房に大小があることやカキの花が雌雄異花であることの謎に迫ったり、春にひとときわゴージャスな花を咲かせるようなサクラの育種開発を目指したりしています。また、種子や果実の成長について調べ、そこから分かったことを育種に利用することで、消費者の目を惹くような面白い形の豆や果物の開発も目指しています。



ブドウの房の大きさ・形はいろいろ、粒の大きさも大小様々



カキの雌花(左)と雄花(右)。どうやって雄と雌が分化発生する？しかも花序の形も異なる



花や花序の形をはじめ形態多様性を調査できる本庄農場のサクラ遺伝資源



豆の形をくびれさせてハート型にするには？

見た目が大切な園芸作物

多くのスーパーマーケットの入口近くには、彩りや種類が豊富な果物と野菜がディスプレイされています。園芸作物の多様な形や色彩は、私たちの健康で豊かな食生活の象徴ともいえます。皆さんの感性と観点で、そこに変わった形の何か一品を新たに加える研究開発をしてみませんか？ もれなく植物の形態形成の不思議を解明するという学問上の特典が付いてきます。

野生の植物を用いた品種改良



小林 伸雄 教授

キーワード

花、野菜、品種改良、ツツジ、出雲おろち大根、地域活性化

2 創縁を
ゼロに



野生の植物から発達した品種

花屋の店頭にあるきれいな花や、スーパーにならぶ野菜や果物のもとは野生の植物を品種改良したものです。

ベルギーの花の博覧会に飾られているこのような色とりどりのツツジの花は、日本の各地に自生する野生のツツジをもとにきれいな花や変わった花が選抜されて品種改良が行われ、国内外に渡って広まりました。



西洋ツツジ(ポットアザレア)

江戸時代の園芸植物を活用する

ツツジの品種改良は江戸時代の元禄時代を中心に最も盛んに行われたことが知られています。当時つくられた品種のなかには写真のように面白い形をした品種；雄しべが花びらに変化した八重咲き、花びらが雄しべに変化した采咲き、あるいは、花びらが散らずに緑色になって残る見染性などの多様な形態を示す花があります。



多様な花を持つツツジの古品種

江戸時代に改良された貴重かつ面白い品種の遺伝子を解析・活用して、さらに新しい品種を作る研究を進めています。

特産の品種開発による地域貢献

花より野菜に興味がある人も多いでしょう。私は「出雲おろち大根」という辛味大根を品種開発し地域普及を進めています。島根県の宍道湖周辺に自生する野生のハマダイコンをもとに、より辛く、より栽培しやすくなるように改良したものです。色付きのダイコンと交配し、紫や赤色でさらに食品機能性の高い「おろちダイコン」も作ることができました。野生の植物を利用して地域特産品となる新たな品種をつくりだし、地域の活性化に貢献するという研究分野もあるのです。



「出雲おろち大根」'スサノオ'

植物の香りで 島根県を活性化しませんか？

キーワード

香り、園芸植物、機能性、
ポストハーベスト

2 飢餓を
ゼロに



池浦 博美 准教授

園芸植物の香り

植物の香りは、自己防衛や繁殖のために重要な役割を担い、栽培条件や環境要因によって大きく変動することがわかっています。また香りは、風邪を引いたときや鼻をつまんで食べ物を口にしたとき、味が分からなくなるように、食べ物の風味を決定づける要素です。さらに、香りは揮発性成分であり、何らかの生理活性を示すものが多く、利用・実用面でも魅力的な分野といえます。これまで、植物の持つ香りは、農産物や食品において極めて重要な品質要素であるにもかかわらず、園芸植物分野では分析や同定の難しさから他の品質要素に比べ取り残されているのが現状です。



実験材料のエゴマ

エゴマは種子油だけでなく野菜としての利用可能性の検討

私は、園芸植物である野菜、花などの生産、貯蔵、加工において高品質化を目指し、特に香りに着目し、その機能性および利用に関する研究を行っています。主に、島根県の特産物であるエゴマ葉の高品質化生産方法の検討や新たな加工品の作出などの応用



エゴマの栽培状況

について検討しており、様々な栽培条件によりエゴマを栽培し、エゴマ葉の生育調査や香気成分を解析しています。現段階では、栽培条件を変化させるとエゴマの葉の香りも変化することがわかっています。

島根県の特産物の品質向上と需要拡大に貢献しませんか？

島根県のエゴマ生産は拡大していますが、エゴマの栽培方法や加工などに関する研究は少ないのが現状です。皆さんと一緒にエゴマの栽培から加工、販売に至るまで、島根県の地域資源を利用した付加価値の高いエゴマ葉加工食品への利用について検討し、地域活性化の一助となるような研究を行いませんか？ さらに、エゴマを含めた園芸植物の香りの研究は、より芳醇で好ましい香りがする園芸植物の品種育成をはじめ、栽培技術および加工技術の革新につながるものであり、島根県の特産物の品質向上と需要拡大に貢献することが期待されます。

サクラを「いつでも」「どこでも」咲かせる技術



田中 秀幸 准教授

キーワード

サクラ、休眠、周年開花

15 障の費かさも
守ろう



サクラが咲かなくなる？

花見は日本の文化であり、サクラは日本人にとって最も親しみのある花の一つです。しかし、温暖化の影響で近い将来にはサクラが咲かなくなる可能性があります。そうなっては、日本の文化である花見が消滅してしまうので、サクラの開花メカニズムを解明して、どのような状況でもサクラが咲くようにしたいと考えています。



島根大学本庄総合農場が保有するサクラ

サクラの開花メカニズムーなぜ春に咲くのかー

サクラは春に一斉に花を咲かせますが、その花芽は昨年夏に作られ始めます。そして、秋になり日長や気温が低下することで、花芽は成長を止めて眠ってしまいます（これを休眠と言います）。この休眠は、冬の低温に一定期間遭遇することで打破され、花芽の成長が再開して春に開花します。つまり、上で述べたサクラが咲かなくなる理由とは、温暖化により冬の低温遭遇時間が短くなることで、休眠が打破されずに花芽が眠ったままになるからです。そうならないために、サクラの品種ごとに休眠打破に必要な低温時間を把握することが必要です。そこで、島根大学の本庄総合農場に植栽されている約160品種のサクラのうち、100品種について休眠打破に必要な低温時間を調査し、それらを明らかにしました。また、その低温時間を処理することで、サクラ切り枝を12月に開花させることに成功しています。



サクラの開花メカニズム

サクラの周年開花にむけて

12月より前に開花させるためには、さらに詳細にサクラの開花メカニズムを明らかにする必要があります。もし、それらを解明できれば、サクラを一年中咲かせることも可能かもしれません。これは私の壮大な夢ですが（科学により、民話「花咲かじいさん」を実現）。もしサクラの周年開花に興味があれば、ぜひ一緒に研究しませんか？



低温処理により12月に開花したサクラ

左：'関山' 中央：'一葉' 右：'御衣黄'

花色の多様化を探る



中務 明 准教授

キーワード

ツツジ、着色、アントシアニン、遺伝子

15 陸の豊かさも
守ろう



野生の植物はシンプル

自然の中の植物は花の色が限られています。例えばツツジの花では、赤と白あるいは紫と白しかありません(図1)。何故赤い花は赤く見えるのでしょうか？ それは赤いアントシアニン色素を持っているからです。逆に白い花は色のない色素しか持っていない。しかしながら私たちが知っている植物の色はもっと様々なものがあります。その多様な色はどのように生まれたのかを知るために、植物自身が持っている色素を作る能力(遺伝子)と作られた色素が生み出す色(着色)との関係を調べています。



図1 異なる花色のツツジ

色の多様化を知る

人の手が加わることで、自然にはない新しい色素の組み合わせが生まれ、ピンクや赤紫などの多様な色となりました。花の色は実際の花を観察することで確認できますが、ツツジは種から花が咲くまでに3年かかってしまうため、色素を作る能力(遺伝子)を直接調べることで花が咲く前に花の着色を予測する研究を進めています(図2)。例えば同じ白色の花でも、花弁に含まれる色素の種類が異なることが分かっていますが、外観よりも遺伝子の情報を利用するとより詳しい色素の状態を理解することが出来ます。



図2 ツツジの色素分析

新しい色を作るには

これまで自然の偶然や先人の知恵によって新しい色が生み出されてきました。しかしながら最新の分析技術を使って、花が咲かない状態でも色素の状態を予測できることが期待されています。

青色を濃くするには、青い色素を蓄積するだけでなく、青みを強くする別の色素が必要なことが分かっています。また異なる色を同時に咲かせる花も存在します(図3)。今後は色の模様についても研究したいと考えています。みなさんも花の色について研究してみませんか!?



図3 同じ花に異なる色を持つツツジ

植物を利用して生活を豊かにする



加古 哲也 助教

キーワード

薬用植物、花き・観葉植物、植物遺伝資源、育種、栽培、流通

15 陸の豊かさも
守ろう



実は身近な花き・工芸作物

皆さんが普段利用している植物は何かと問われて想像するのは、コメ、野菜、果物でしょうか。食用作物は身近に感じられますが、それ以外にも私たちは多様な植物を利用して生活しています。例えば、花。人生の節々に遭遇する、歓送迎会、結婚式、葬儀といったイベントには、必ず花があり、出会いと別れに色を添えています。ほかにも、薬用植物や紙の原料となる工芸作物など、食べることはできなくとも、生活の質を向上させるために欠かせない農産物は身の回りに無数にあります。

花で生活を豊かに

日本は花の国です。日本の野生植物からはアジサイ、ツツジ、サクラといった優秀な花き品目が生まれ、それらは世界で活躍しています。一方で、いまだにひっそりと野で咲き続けている野生植物もあり、そういった植物を園芸的に評価し、利用できるようにすることは重要な課題です。例えば、島根県の隠岐諸島を中心に自生しているトウテイランは、今まで着目されてこなかった植物でありながら高い観賞価値を持ち合わせています。このような野生植物を含む花き全般について園芸的に評価し、品種改良し、栽培・流通技術の開発を行うことで花きの価値を高める研究を行っています。



図1 隠岐諸島に自生するトウテイラン



図2 鉢物として栽培されたトウテイラン

地域に根付く植物利用文化の再興

島根県松江市の大根島（八束町）は、古くから、百花の王といわれる花木のボタンや薬用植物として重要なチョウセンニンジンの産地として知られています。しかし、伝統的な品種や栽培技術の利用には多くの手間を要し、非効率的な点も多数あるため生産量増加への障壁となっています。そこで、新品種の育成や新たな栽培技術を応用し、効率的に高品質な花苗や薬用原料を生産する技術の開発に取り組んでいます。



図3 大根島で育成されたボタン品種群

農村の歴史を掘り起こす



中間 由紀子 准教授

キーワード

農業政策、農村社会、歴史、生活、女性組織

10 人や国の不平等をなくそう



農学分野の歴史研究

終戦後、日本はアメリカを中心としたGHQの占領下に置かれます。GHQは日本政府に対して「民主化」、つまり1人1人が自由で平等な社会を実現するために様々な政策を実行するよう指示します。とくに急がれたのが農村の民主化です。農村では地主が小作人から農地の使用料として高額な小作料を徴収しており、その関係はまるで殿様と家来のようなでした。戦後、農地改革によって地主の農地は解放され、小作人は自作農となり、建前としては主従関係のような状態はなくなります。しかし、実際にはそうした古い関係は根強く残ります。その後、農地改革の成果を基盤として民主化のための事業が行われますが、古い慣習の残る農村社会でどのような結果が生じたのかということに関心を持って研究を行っています。



生活改善グループの活動事例
(『生活改善普及事業』、農林省、1955年)

「考える農民」の育成と農村社会

私が研究対象としているのは「生活改善普及事業」です。この事業は元々アメリカの事業で戦後になって日本に導入されたものです。その目的は、農村の生活水準の向上と共に「考える農民」を育成し、それによって農村の民主化を実現することにあります。「考える農民」を育成するためには、生活改善に意欲を持った人達によって主体的に結成された「生活改善グループ」が必要であるとされます。しかし、当時の資料の内容や事業関係者への聞き取りから、実際に有志の女性達がグループを作ろうとすると婦人会（戦前から続く農村の代表的な女性組織）との間に激しい対立が生じていたことがわかりました。

戦後日本の経験の重要性

戦後日本の農業や農村について明らかになっていないことはまだ多く、事実そのものを解明していくことはとても大切です。さらに、敗戦後に驚異的なスピードで復興を遂げた日本の経験は、発展途上国の行く末を考える上で貴重な参考事例であるといわれています。これからも綿密な資料調査を実施し、事実の核心に迫る研究をしたいと考えています。



近年は東北地方を中心に調査・研究を行っています(写真・岩手県二戸郡)

中山間地域マネジメントを多角的に研究し、地域社会の問題解決に貢献



保永 展利 准教授

キーワード

中山間地域、食農関連産業、地域ブランド、コミュニティ、域学連携

12 つくる責任
つかう責任



なぜ中山間地域研究をするのか？

中山間地域保全のあり方を研究しています(図1)。なぜ中山間地域研究をしているのかというと、それは私が中山間地域の農業集落・農家の生まれであることが影響しています。幼い頃から農業や農的生活にかかわってきましたが、農業だけでは地域の発展が難しいことを実感しています。一方、農業がないと環境保全や地域社会の維持ができません。農業や地域文化を生かした地域的发展、そのための地域マネジメントが必要と考えるようになりました。

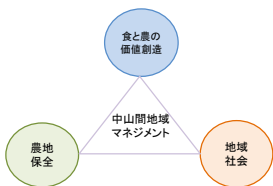


図1 研究対象

「多様な学び」から「総合力」を身につける

農業の地域的发展を研究するには、農業の知識だけでなく、経済、経営、流通、心理、地理、歴史、調査方法など多様な知識が必要になります。

例えば、地域でつくられる加工食品のブランド化を考える場合、地域の立地や歴史、経営を踏まえる必要があります。また商品売るためには、流通や消費者心理の知識が必要になります。学生と行った有機トマトジュースの評価では、中山間地域で有機農産物加工を行っている現場の調査や選択実験という方法で消費者調査を行い、有機栽培に対する消費者の評価が高いことを実証しました(図2)。現在も消費者層を都市部に広げて研究しています。



図2 現地調査(ほ場見学や生産・加工状況の調査)の様子です。

「地域での学び」から「学生の主体的研究」へ

地域にあった方向性を導き出すために、実際の中山間地域社会との関係性をもちながら実態から経験的に学んでいます(図3)。また、学生がもっている問題意識や経験と私がコラボすることで何ができるのかを常に考えています。これまでにない新しい視点をもっていれば、それを生かすことを考え研究室の活動として取り入れます。学生も主体的に研究に取り組むことができ、社会に必要なコミュニケーション力などが身につきます。研究成果も大学院に進むことで社会に広く伝える機会が増えます。



図3 ゼミでのフィールドワークの一つとして、現地の女性部と一緒に地域体験ツアーでの料理の準備を行っているところです。中山間地域の現場調査以外にも地域住民と一緒に活動し経験的に学びます。

青果物のインターネット流通の仕組みとは？



末永 千絵 助教

キーワード

経済、農産物、食品、流通、Eコマース

12 つくる責任
つかう責任



研究の背景

年々市場が拡大している、インターネットを通じた商品の売買（Eコマース）のうち、日持ちしない青果物が農家から消費者に届くまでの流通の仕組みについて興味がありました。これまでの研究ではインターネットは、時間・場所を問わず売買ができることから生産者が消費者へ直接販売する場合や、多数の会員・膨大な品揃えを持つインターネット販売が専門の企業（Eコマース企業）のビジネスモデルに着目した研究が中心で、Eコマース企業で販売されている青果物が生産者から消費者に届くまでの流通の仕組みは不明となっていました（図1）。

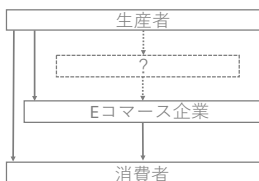


図1 これまで考えられてきたEコマースによる青果物の流通経路図

研究の成果

社会において様々な仕事がある通り、人々は仕事を分業することで、社会全体を維持しています。その論理と同じように、ネット通販で青果物を大量に販売する場合も、青果物生産者から消費者に届けるまでに、様々な企業・団体が必要な仕事を役割分担することで、新鮮な青果物を豊富に揃え、効率的に販売する仕組みがつけられていることがわかりました（図2）。

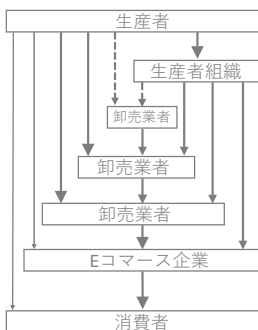


図2 研究結果

図にあるEコマース企業と生産者の間に入っている生産者組織、卸は無駄に入っている訳ではなく、役割分担しながら消費者に届けています

現在の研究内容

ここで明らかにした仕組みにより、生産者は効率的に売ることができず、自分が納得する価格で売ることが難しい問題があります。また流通において情報通信技術（ICT）が生産段階に進むにつれ活用されていない問題もあります。そこで人口減少が進む中、青果物だけでなく、農産物・食品流通におけるEコマースやICT活用による、地域の存続や活性化の方策について研究するとともに、担い手不足や物流の問題に対するICT活用による農業・食品流通の持続可能性などについて、島根大学で皆さんと一緒に研究できたらと思います。

将来の農業後継者は誰ですか？



ロサリア ナタリア セレキー 助教

キーワード

経営、経済、ICT、農業、継承

12 つくる責任
つかう責任



インドネシアと日本の農業について

農業は世界で重要な戦略部門として位置づけられています。インドネシアは多様な農業・漁業と豊かな海洋資源を有しています。しかし、日本と同様に小規模農家が主です。小規模農家は主に食用作物を生産していますが、経営の規模が小さいと、収入が少ないだけでなく、資本や設備が十分でないため、後継者が集まりにくい状況となっています。一方、豊かな第一次産業と環境・資源を守るためには、新たな知識と発想に基づいた若者の参画が不可欠といえるでしょう。



図1 インドネシアの美しい水田と農場

ケーススタディに基づいた農家の問題の実態把握

インドネシアが現在抱えている農業後継者の課題は日本も共通しています。日本の農業は農業労働力の不足から、小規模農家の多くは他の農家、法人、集落営農に農地や作業の一部を委託し、農業協同組合などの組織・団体からの支援を受けながら農業経営を行ってきました。一方、ICT（情報通信技術）をはじめとする先端的な農業技術「スマート農業」が国内外で注目されており、過疎・高齢化先進地の島根県でもその流れが加速しています。「アグリバイオビジネス」の観点から、これらの新たな取り組みへの調査・分析が求められています。



図2 農村現地調査の一コマ

「アグリバイオビジネス」の将来性

農業経営の発展と地域農業・農村振興のために、農家はどのような組織や形態を模索すべきなのでしょうか。この問いは、「アグリバイオビジネス」を展開する上で、国内外を問わず極めて重要です。皆さんも、食料消費、農業経営・経済をめぐる様々な課題をグローバルな視点から研究しませんか。



図3 農業体験で農業経営を学び、知識を共有

日本林業はなぜ発展しないのか？



吉村 哲彦 教授

キーワード

日本林業、林業機械、技術革新

15 陸の豊かさも守ろう



日本の林業はなぜ発展しないのでしょうか？

最先端の技術が投入されたヨーロッパの林業は、環境に優しい素材やエネルギーを持続的に供給する成長産業です。なぜ日本の林業はヨーロッパのように発展できないのでしょうか？それは、日本林業の生産手段に技術革新が起こっていないからです。労働コストの高い先進国で林業を行うには機械化による生産コストの削減が不可欠ですが、これまで林野庁（国）の主導によって導入された高性能林業機械は、生産性の向上にはほとんど寄与しませんでした。日本の山で林業機械を効率よく使うには生産基盤となる林道が必要ですが、日本の山で作られている作業道という急勾配で幅の狭い道は生産性の向上を阻害しています。それなのに、日本では高性能林業機械と作業道が行政の補助金によって強力に後押しされているのが現実です。

どうすれば日本の林業は発展できるのでしょうか？

日本林業の生産手段に技術革新を起こすことが必要ですが、これまで林野庁（国）が開発してきた林業機械の中で役に立ったものはほとんどありません。日本の林業現場に必要な技術革新を起こすためには、ヨーロッパと日本の林業技術をコンセプトレベルから比較することで、なぜ日本林業の生産性が低いのかを明らかにする必要があります。そこで、これまで研究活動を通じて日本の高性能林業機械、架線系集材、林道と作業道の問題点を明らかにして、技術的な解決方法を提示してきました。特に架線系集材では、ランニングスカイラインという日本を代表する索張りの問題を模型による力学実験（図1）を通じて明らかにし、その改善方法を示すことに成功しています。

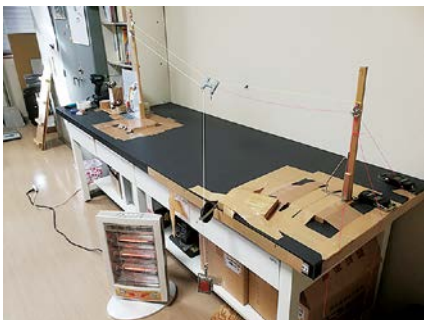


図1 架線集材の模型実験

林業は高度な知的産業

日本林業の中に技術革新を起こすには、物理学、数学、統計学、機械工学、情報科学、経済学、経営学などあらゆる知識を総動員して課題に取り組む必要があります。これまでの日本林業の常識をリセットして、ゼロベースで考え抜くことが求められています。

人工林は間伐が大事です！



高橋 絵里奈 准教授

キーワード

人工林、スギ、ヒノキ、間伐、樹冠

15 緑の豊かさも
守ろう



間伐の基準って何だろう？

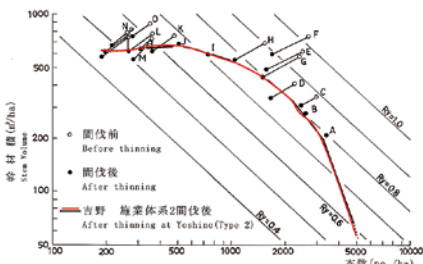
私は奈良県の吉野林業地に始めて行った時に、美しいスギ・ヒノキの人工林と間伐選木の熟練技術者だった埴忠一さんに出会いました。埴さんに「間伐選木の基準って何ですか？」と尋ねたのですが、「長年の経験と勘ですなあ〜。」と言われました。しかし、何かを見て伐る木と伐らない木を選んでいるに違いないし、その言葉にされていない基準を知りたい！と思ったのが、私の研究の原点です。



吉野林業地の90年生スギ人工林と熟練技術者

何を調べたら間伐の基準が分かるのだろう？

間伐の選木基準を明らかにするには、どこで何をしているか、どうしてその木を伐る／残すのかを聞いてみないとわかりません。そこで、山の中で500本くらいの木の位置図を書いて、選木の時の歩く経路と木を伐る／残す理由を調べ、埴さん基準で管理さ



資料：南近畿四国地方スギ林分密度管理図(林野庁1998)
奈良県スギ・ヒノキ人工林林分収穫予想表(奈良県、阪本奨学会1986)
熟練技術者による間伐の特徴

れている人工林がどのような特徴を持っているのかを調べました。その結果、埴さんは残す木を選び不要な木を伐っていること、将来欲しい形質と大きさの木になる見込みを樹冠(葉っぱがついている部分)から判断し、見込みのある木をできるだけ均等に配置していること、木が大きくなるほど大きな面積を取れるように人工林全体の木の本数を調整していることがわかりました。

熟練技術者の技能を少しでもまねできるようにしたい！

間伐選木の基準は、技術者個人の技能です。しかし例えば、樹冠の大きさを判断基準として数値で表すことができれば、誰でもある程度はまねができるようになります。熟練技術者は現在、高齢化が進んでおり、後継者は非常に少なくなっています。貴重な技術が消える前に、少しでもまねできるようにしたいと思っています。そのためには研究も引き継いでくれる後継者が必要です。みなさんも一緒に山の管理の研究をしてみませんか？

鷹の目線から森を観る リモートセンシング



米 康充 准教授

キーワード

リモートセンシング、
地理情報システム、ドローン、
情報通信技術、人工知能

15

鷹の目かさも
守ろう



森林を観るのは大変！

研究のきっかけは、森林がどのように成長してどのように変化していくの知りたかったことです。そこで森林調査を始めたのですが、1本1本の木を測っていても、途方もなく広がる森林を調査しつくすことはできませんでした。しかも、坂が急で登ったり降りたりで調査も大変でした。それだけ苦労をしても、現在のことはわかりません。森林の変化を調べようとしたら、何十年と同じことを繰り返さないといけません。森林は時間と空間に大きく広がっています。こんなことでは森林の変化なんて解明しようと思ったら、とてつもない時間と労力がかかります。はたと、どうしたらよいものかと途方に暮れました……。

そうだ、リモートセンシングを使おう！

そこで利用したのが航空写真でした。航空写真は日本全国で手に入ります。しかも日本では1947年から数年毎のデータが撮られています。そこに目をつけ、学生の頃は一生懸命航空写真を目で見て読み解き、地図に書き写してきたものです。それでもやっと数十haのことがわかった程度でした。大学卒業後は測量会社や研究所に務め、森林計測の研究開発に携わりました。航空写真だけでなく、レーザ測量や人工衛星といった道具を用いて時空間に広大に広がる森林を観察する方法を作りだし手に入れました。



ドローンと地上写真で作成した森林3Dモデル

森林は広大である、そこを突き進む

現状の森林でさえその実態はどうであるのか、わかっているようでまだわかっていない部分が多い状況です。調べる森林の空間・時間の広がりに応じて、衛星、航空写真、レーザ測量、ドローン、地上レーザの利用技術の開発をし、森林の実態を明らかにしていく研究を行っています。とは言え、1本1本の木を測っていくのも重要です。野外活動も好き、機械いじりも好きな諸君に期待しています。



森林調査のためドローンを操縦する研究室学生
鷹は来ないが鷹につきまるとわれる。

入学後に、まず共通の基礎となる科目を学んだ後、2年次に教育コースを決定します。そして各コースの発展的な科目や応用的な科目へ進んでいき、身近な生物や環境問題を科学的に捉える方法や、実社会で使われている工学を学びます。

Department of Environmental and Sustainability Sciences

環境生物学 コース

中山間地域の森林・里山から農耕地を経て河川・汽水域に至る広域な環境に生息する生物を対象とします。植物の病気発生機構、昆虫の利用や防除、自然界での微生物の働き、森林の健全な育成と保全などに注目し、その生命現象と多面的な意義について履修します。

生態環境工学 コース

ヒトと自然の共存や生態系の保全を目指し、生物が生息する水・土環境で生じる多様な現象を理解するための知識と豊かな自然を守っていくために必要な保全技術を修得します。

地域工学 コース

農村地域や中山間地域が有する地域資源を有効に活用して、地域の豊かな生産環境・生活環境・自然環境を創造・管理・保全するための専門的な基礎学力と技術を、工学的な観点から修得します。

環境共生科学 コース

環境調和型社会の構築を目指し、複雑多岐にわたる環境問題や社会問題の解決に貢献できる広域専門家として必要な知識や技能を幅広く修得します。

環境共生科学科

キーワード

環境調和、土・水・生物、保全・管理、科学・工学

植物を病気から守る 植物のお医者さん



上野 誠 教授

キーワード

植物、農業、病気、微生物、
新規物質

2 菌類を
ゼロに



植物も病気になる

私たち人間が病気になるように、植物も病気になります。私たちは、病気になった時に薬を飲むことで、その症状を改善することができます。しかし、植物は自身で薬を飲むことはできません。そこで、私たちは、植物に発生した病気を診断して、農薬と言う薬を処方することで、治療を行います。しかし、植物の病気の中には農薬の影響を回避して、農薬が効かない耐性菌となるものがあります。こうなると、今まで使用できた農薬が使用できなくなってしまいます。そのため、非常事態に備えて、新たな農薬の元となる物質を探索しておくことが必要になります。

植物や微生物が生産する物質を活用して病気を防ぐ

市販されている農薬に含まれている植物の病気を防ぐ物質は、植物や微生物から発見されることが多いです。研究室では、有効活用されていない植物やさまざまな場所から分離した微生物を活用して、植物の病気を防ぐ物質を探索しています。これまでの研究では、きのこから分離した菌を培養した抽出液



図1 イネに発生しているイネの重要病害の1つであるイネいもち病の病斑と胞子

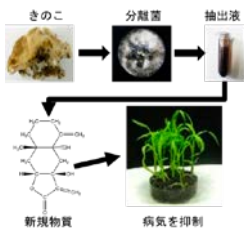


図2 きのこから分離された菌が生成していた新規物質

中から、イネいもち病菌(図1)に対して殺菌効果を示す新規物質を発見することに成功しました(図2)。また、この新規物質は、イネいもち病菌以外の病原菌にも殺菌効果を示すことが明らかにできました。今後は、今回の新規物質がどのように植物病原菌に作用して、殺菌効果を示すのかを明らかにしていくことにしています。

植物の病気を防ぐ新規物質を発見する

世界中には、多くの植物や微生物が存在していて、様々な物質を生産することが知られています。その中には、私たちが発見できていない、植物の病気を退治してくれる重要な物質が存在しているはずです。植物の病気を防ぐことは、私たちの食生活の安定にも繋がります。みなさんも農業に貢献できる植物の病気について研究してみませんか(図3)?

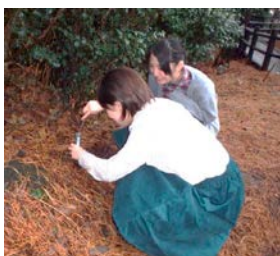


図3 サンプル採取の様子

植物の病気を防ぐ 希望の「光」



木原 淳一 教授

キーワード

光、植物の病気、病原微生物、
環境情報、適応

2 肌触りを
ゼロに



微生物も光が見える？

みなさんは、「昼と夜」、「日向と日陰」を
何から判断していますか？ 私たちと同じ
ように、動物や植物は、環境情報のひとつ
として光を利用しています。実は、肉眼で
は見ることのできない微生物も、光を感じ
て環境に適応して生きています。例えば、
イネの葉の病気(図1)を引き起こす植物病
原微生物(イネごま葉枯病菌)にはどのよ
うに光が関わっていると思いますか？



図1 イネごま葉枯病に感染したイネ葉

日焼けと孢子形成

動物は、紫外線によって黒色素(メラニン)を合成し、紫外線を防御して
います。同様に、イネごま葉枯病菌(菌叢は灰色)に紫外線を照射すると、メ
ラニンを合成して濃緑色になりました(図2)。これは、イネごま葉枯病菌が紫
外線を認識して日焼けをした、ということです。一方、イネごま葉枯病菌は、
孢子を多数形成し、風によって伝搬します。この孢子形成は、紫外線によって
促進され、青色光によって抑制されることが明らかとなりました(図3)。イネ
ごま葉枯病菌は、青色光によって昼と夜を区別し、昼間の紫外線の量によっ
て孢子形成量を調節していると考えられています。



図2 日焼けをした菌叢(右半分)

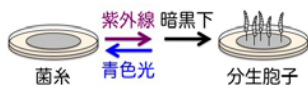


図3 光による孢子形成

生命現象の謎解きから社会貢献へ

植物の病気を防除するために、主に殺菌剤をはじめとした化学防除が行わ
れていますが、耐性菌の出現や生態系への影響も懸念されており、新しい防
除技術の開発が望まれています。イネごま葉枯病菌の光環境応答は、自然環
境の中で生きていくために適応して進化してきた結果であると言えます。光
を利用した植物病害の防除を目指して、植物病原菌の光受容や光反応の謎を
一緒に解明してみませんか？

誰もやりたがらない コハナバチ類の研究



宮永 龍一 教授

キーワード

昆虫、社会、適応進化、穴掘り、
後継者



コハナバチとは？

「コハナバチをご存知ですか？
多分ご存じ無いでしょうな。それ
もたいして悪いことではないで
すよ。コハナバチを知らなくとも
人生のいくつかの喜びはけっ
こう味えるのですからね」。フ
ァーブルは『昆虫記』のなかで、
コハナバチについてこのように
語り始めます。コハナバチとは
花粉と花蜜で子供を育てる「ハナ
バチ」の仲間（図1）。ミツバチと
同じグループに属します。でもこ
このハチはミツバチのようにヒト
の役に立つわけではありません。



図1 キバナコスモスに訪花するサビイロカタコハナバチ

じゃあ、なぜコハナバチを研究するの？

昆虫には私たちと同じように「社会」をもつものがあります。その代表がミツバチです。ミツバチに見られるような高度な社会がどのように進化したのか？ その問いに答えることができるのがコハナバチなのです。普通、生きものの「暮らしぶり」は種類が同じであればそう大きな違いはありません。なぜなら暮らしぶりは、その生きものが利用する環境のなかで最も都合が良いよう適応進化を遂げたからです。ところがコハナバチは同じ種でありながら、個体群によって単独性であったり、社会性であったりします。ここがポイントです。社会性は単独性から進化したに違いない。でも多くの社会性昆虫にもはや単独性個体群など存在しない。コハナバチと違って社会のルーツは失われているのです。

ところでなぜ誰もやりたがらないの？

2つの理由があります。まず効率が悪いこと。この研究は「答え」らしきものを得るのに数年単位のフィールドワークが必要となります。効率のよい研究が求められる現代の大学には馴染みません。もう一つはコハナバチ類が「地中営巣性」であること。彼らの暮らしぶりを知るには、とっても大きく深い穴を人力で掘らねばなりません（図2）。これには相当の技術に加え、体力と気力が要求されます。日本の大学でコハナバチ類の生態を研究しているのはどうやら私だけのようなのです。誰か私の後継者になりませんか？



図2 西表島でアネッタコハナバチの巣を発掘する筆者。巣の最深部は地下1.2mに達した。

昆虫はどうやって冬を越すのか？



泉 洋平 准教授

キーワード

昆虫、越冬、休眠、低温耐性、温暖化

15 陸の豊かさも守ろう



冬の寒さは昆虫にとって生死に関わる問題

私たち人間は冬になり寒くなっても、暖房して家の中を暖め快適に過ごすことができますし、服を厚着すれば外出することもできます。しかし、昆虫はそんなことは出来ないため、寒さは生死に関わる問題となります。昆虫はそれぞれ自分たちが冬を乗り越えるのに適した発育段階をもっていて、例えばカブトムシは幼虫、モンシロチョウは蛹、テントウムシは成虫で冬を越します(図1)。寒くなるまでに決まった発育段階になれなかったものは冬を越すことが困難になります。



図1 土中にて蛹で越冬するオオタバコガ

休眠に入り活動を休止する

昆虫の種類によって寒さに耐える方法は様々ですが、温帯や亜寒帯に生息する多くの昆虫は秋から春にかけて、「休眠」という状態に入り、その活動を休止します。昆虫は休眠に入ると発育段階を進めることを止めます。つまり、幼虫なら幼虫のまま、卵なら卵のままで長い時間過ごすということです。「休眠」は、日の長さが短くなることや気温が下がることを昆虫が感知することで引き起こされます。「休眠」に入った昆虫は、体内に糖などを蓄えたりして低温に対する耐性を獲得します(図2、3)。

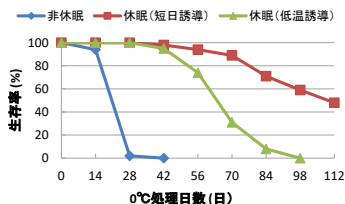


図2 0°C処理による死亡率におよぼす休眠誘導の影響

オオタバコガは休眠に入ることでも0°Cでも3ヶ月以上生き残ることが出来ます。

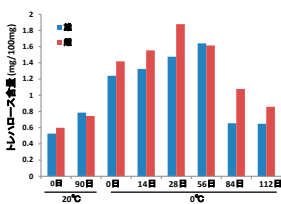


図3 オオタバコガにおける低温による糖の蓄積

休眠に入ったオオタバコガは低温に曝されることで体内にトレハロース(糖の一種)を蓄積します。

昆虫の越冬を研究することは何に役立つのか？

昆虫がどうやって寒さに耐えるのか、どのくらいの寒さに耐えることが出来るのか等の研究は、私たちの生活において何の役にも立たないのを見えます。しかし、どのくらいの寒さに耐えることが出来るのかが明らかになれば、日本のどのあたりまでその昆虫は分布が可能なのか、また今後温暖化が進んだ時にどのあたりまで分布を拡大することが出来るのか、等の予測をすることができます。それにより、農業害虫や有害な害虫に対する防除に役立ちます。皆さんもそんな昆虫の越冬について研究してみませんか？



久保 満佐子 准教授

キーワード

森林動態、半自然草原、植生、保全



樹木の生活史から見る森林の動き

森林は、地球上最大で最長寿命の生物である樹木が骨格となって形成されています。一般に樹木は数百年、長い樹種は数千年を生きます。その長い寿命の中で樹木は決して動くことはありませんが、小さな種子から発芽し、成長し、林冠木になり、枯死していくことで、森林は絶えず変化しています(図1)。こうした樹木の生活史を調べることで、広大な時空間スケールで変化する森林の動きを知ることができます。



図1 樹木の生活史

種子から発芽して実生が定着し、成長し、林冠木になるまでに樹木の周りでは多様な攪乱が発生している。

草原から森林への動き

草原は火入れや放牧、草刈りなどの管理により維持されてきた里山景観の一つです。多くの草原は森林への遷移の途上にあるため、両者は密接な関係をもって存在しています。草原には既に多様な樹木が生育し、さらにそこ



図2 三瓶山麓の火入れ草原西の原と絶滅危惧種のオキナグサ

に依存して生育する植物が生育しています(図2)。それらがどのような環境で生育しているのかを調べ、保全活動に役立てています。

いろんな「もり」

日本にはいろんな「もり」があります。奥山の原生林、里山にある薪炭林や人工林、社叢林、人家を守ってくれる屋敷林などなど。さらに古来日本人は、信仰の森を「杜(もり)」として区別していました(図3)。もしくは「杜」である場所が「森」となったのかもしれませんが。どの「もり」も人の世代を超えて引き継がれてきたものです。そしてまた、今ある「もり」をどのように次の時代に手渡ししていくのか、森の動きを読みながら、森の恩恵を受けながら、考えていきます。



図3 奥出雲地方にたたら製鉄を伝えた金屋子(かなやご)神が降り立った木として祀られているカツラ(雲南市菅谷たたら: 国重要有形民俗文化財)

農薬を使うと土が死ぬ？



巢山 弘介 准教授

キーワード

土壤微生物、農薬、影響評価



土の中に住んでいる小さな生きもの

皆さんは何が思い浮かびますか。オケラやミミズでしょうか。いえいえ、土の中にはもっと小さくて肉眼では見えない生きもの（細菌や糸状菌等の微生物）がたくさん住んでいるのです。微生物は地球上のいたるところに住んでいますが、特に土の中に多く、動植物の死骸や排泄物等の有機物を分解し、水、炭酸ガス、アンモニア等の無機物に戻します。そして、植物はそれらを再び利用して生育するのです。つまり、微生物のおかげで物質がうまく循環するからこそ、動植物は生と死を繰り返すことができるわけです。

農薬を使うと土が死ぬ？

ですから、土の中の微生物が農薬等の人工化学物質によってダメージを受けたら大変ですね。よく「農薬を使うと土が死ぬ」と言われますが、本当にそうなのか？ 単なる「思い込み」ではないのか？ そのような疑問を持った私は、それを科学的に評価する研究を行なっています。

その一つとして、植物の繊維質（セルロース）を分解する微生物のはたらきや種類に農薬が影響するのかを調べてきました。そして、例えば図2の③や④のセルロースは①や②に比べて分解量が少なく、入り込んだ微生物の種類も違っていることが分かりました。ただ、農薬にも様々な種類があり、微生物のはたらきも様々なので、「農薬を使うと土が死ぬ？」について明確な答えを出せてはいません。皆さん、私と一緒に研究を進めませんか？



図1 セルロースの分解を調べる実験の例

土にセルロース（沱紙）を埋め、数週間後に取り出します。重量の変化から分解された量を調べます。また、沱紙の中の微生物の種類も調べます。

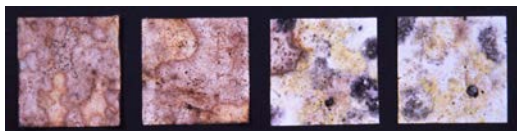


図2 土に埋めて4週間後に取り出したセルロース（沱紙）の例

- ① 農薬を混ぜていない土
- ② ある農薬を通常の使用量で混ぜた土
- ③ ある農薬を通常5倍混ぜた土
- ④ ある農薬を通常10倍混ぜた土

「農薬をよく知っている人材」になろう！

日本において「農薬」とは「農薬取締法に基づく登録を受けたもの」と言えます。その登録を受ける過程で人間や水産動植物等へのリスクは評価されていますが、今のところ、土の中の微生物へのリスクは評価されていません。だからこそ、上記のような研究の意義があります。

一方、登録の過程でどんなことが評価済なのかを知った上で研究することも大切です。講義で詳しく話します。「農薬をよく知っている人材」になって研究し、社会に出てください！

森林を水循環・水資源の観点から理解する



橋本 哲 准教授

キーワード

森林、水源流域、水資源、洪水緩和、
渇水緩和



森林の水循環特性を基盤として水資源を獲得している

日本全国で見ると、年間使用量のうちおよそ90%は、河川から取水しています。河川流量は降水により増減します。豪雨により大洪水となれば災害が発生します。長期間の無降雨により渇水となります。私たちの生活や農業などの水利用パターンは大きく変化しませんから、河川の水量はなるべく一定の方が好都合です。森林には洪水や渇水を緩和するという流量の変化をならす作用があり、私たちはこれを利用しています。水源林の管理を考える上で、実際の現場を対象に、私たちが使用する水量に対して、森林の流量をならす作用を量的に評価することは大切なことです。

実際の現場に適用して、具体的な量で評価する

島根大学の三瓶演習林に小さな試験流域を設けて、この小流域からの溪流流量、降水量などを観測しています。三瓶演習林では日射量、気温・湿度、風速などを観測しています。これらの気象要素を使って蒸発量などを推定しますが、そのためには、樹木やササに付着した雨の蒸発量や葉からの蒸散量を観測し、その特性を把握しておく必要があります。流域への降水が蒸発や渓流水で出てゆく量を降水量から計算して推定する方法を通してその過程の特徴を掴んでゆきます。このような結果を地域の貯水ダム流域に適用して、取水に必要な水量の確保や貯水池の規模に対して、この水源流域の森林がどのように関係しているのかを量的に評価します。



三瓶演習林小流域での流量観測

森林を水循環、水資源の観点から理解しよう

森林には私たちに多くの恵みを与えてくれています。しかし、集中豪雨などによる洪水災害や土砂災害の際には流木被害などの負の側面もあります。森林と水循環の勉強や研究を通して森林流域という私たちにとって大切な土地基盤を理解してゆきたい。一緒に考えませんか？

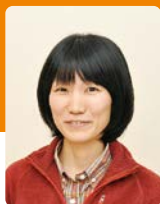


小流域での積雪深の自動観測カメラの設置



地域の水源地貯水ダム

アリ植物にみる熱帯雨林の 昆虫-植物相互作用網



清水 加耶 助教

キーワード

防衛、用心棒、植食者、適応戦略、
ボルネオ



アリを用心棒に雇う「アリ植物」

地球上には、植物を餌とする生き物がたくさんいます。植物は食べられないために、多様な防衛手段を進化させました。そのひとつが、アリを用心棒として利用することです。4,000種近い植物が、花外蜜腺と呼ばれる器官を持っています。アリは花外蜜腺から分泌される蜜を求めて、植物の上を歩き回り、邪魔者を排除します。こうして、植物は防衛というサービスを、アリは栄養分を受け取る相利的な関係が成立します。この関係をさらに強化したのが、熱帯地域を中心に分布する「アリ植物」と呼ばれる植物群です。アリ植物は、幹や棘などが空洞化した特殊な形態をもち、そこにアリを住まわせています(図1)。アリ植物に住む「共生アリ」は、植物上から植食者や病原菌を排除し、植物を保護する役割を果たします。

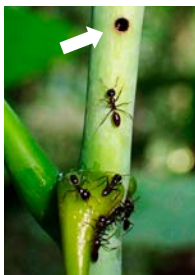


図1 アリ植物の一種 *Macaranga lamellata* の茎内部に住む共生アリ。丸い穴(矢印)から出入りする。

アリ植物を狙う植食者たち

ところが、極めて攻撃的な共生アリが守るにもかかわらず、アリ植物を食べることができる昆虫がいます。私は東南アジアのボルネオ島に通いながら、それらの生態を調べています(図2)。例えば、体表面の化学物質で



図3 アリに随伴されるも攻撃されることがなくアリ植物の葉を食べるムラサキシジミの幼虫

植物やアリに擬態したり、アリに甘露を与え

て懐柔したりするシジミチョウ(図3)、巧みな足さばきでアリを遠ざけるナナフシ、敏捷にアリを避け続けるカメムシ、アリの間をついて産卵し、シェルターを作るタマバエなど、植食性昆虫が独自に進化させた適応戦略がわかってきました。



図2 東南アジア・ボルネオ島での野外調査

熱帯雨林を彩る生物種間相互作用

アリ植物が多く分布するのは、膨大な種類の生物が生息する熱帯雨林の中です。アリ植物を食べる植食性昆虫は、アリ植物とアリとの三角関係だけでなく、他の植食者や、植食者を食べる捕食性昆虫、アリを食べるクモやトカゲなどの動物と相互に関係しあい、複雑な相互作用網を作っています。地道なフィールドワークでその関係性を紐解きながら、熱帯雨林の生物多様性の実態に迫りたいと考えています。

自然環境中での 微生物の生き方を知る



林 昌平 助教

キーワード

微生物、細菌、シアノバクテリア、カビ臭、宍道湖

6 安全な水とトイレ
を世界中に



カビ臭を出す微生物がいる！？

皆さんは雨が降った時に、カビ臭(土っぽい臭い)がすることに気付いたことがありますか？ 土がにおうだけならよいのですが、湖やダムでもカビ臭が発生し、魚介類や水がカビ臭くなることがあります。この臭いの元となる化合物は、微生物が作っていることがわかっています。ですが、具体的にどんな種が作るのか、どんな時にたくさん作るのかなどわかっていないことがたくさんあります。そして、どうやってカビ臭を作らせないようにするかは、おいしい魚介類の生産や安定した飲料水の確保において重要な課題です。

宍道湖、三瓶ダムでのカビ臭の生産者は？

島根県の宍道湖で強いカビ臭が発生し、シジミなどからもカビ臭がする事件がありました。調べてみると、宍道湖にいる、ある特定のシアノバクテリアがカビ臭物質「ジェオスミン」を作っていました。ですが、同じ種でもカビ臭を作らない株もいるようです。また、三瓶ダムでもカビ臭が問題になっています。三瓶ダムではジェオスミン以外に、「2-メチルイソボルネオール」というカビ臭物質も検出されています。三瓶ダムでは、浅いところではシアノバクテリアが、底の部分では放線菌と呼ばれる細菌がカビ臭を作っているようです。



カビ臭を出すシアノバクテリア(左)と放線菌(右)です。フラスコやシャーレを開けると土っぽい臭いがします。

どうやってカビ臭を作らせないようにするか

湖やダムでのカビ臭発生は島根県だけでなく、世界中で問題になっています。場所や時期ごとにカビ臭物質や、生産微生物が異なっています。カビ臭被害から魚介類や水を守るためには、場所や時期ごとにカビ臭物質や生産微生物を特定する必要があります。そして、その微生物の性質を調べることで、どのような時にどのようなカビ臭物質を作っているかを調べる必要があります。湖やダムでカビ臭が発生する場所や時期を予測でき、最終的にカビ臭を作らせない方法がわかれば、魚介類の生産や飲料水の確保の観点から社会に貢献できると考えています。

微生物の生き方に関して他の(全く異なる)研究も行っています。

HP(右のQRコード)で紹介していますのでご覧ください。

微生物生態学研究室 林グループホームページ
<https://www.ipc.shimane-u.ac.jp/quorum>



三瓶ダムの底の泥を採取しています。泥の中にたくさんの細菌がいます。その中からカビ臭を出す株を探します。

水質をととのえる 森の土の生物たち



藤巻 玲路 助教

キーワード

森林生態系、渓流水、水質形成、森林土壌、土壌生態学



雨水と森の湧き水、飲むならどちら？

雨で降ってくる水は、ちりやほこり、大気汚染物質が混じっていて、そのままではあまり飲む気がおきません。しかし、山に足を踏み入れたときに森の中から湧き出てくる水を見て、きれいで美味しそうに見えたことはありませんか(図1)? どちらの水も、元は同じ雨なのですが、なぜこのような違いがあるのでしょうか?



図1 森林を流れる溪流

森林の水質形成と森林土壌の生態系

森林に降り注ぐ雨は、葉や枝に触れ、一部は幹をつたって地面に到達し、土壌に浸透して行きます。そうして地中をゆっくりと流れ、やがて地表面に湧き出て、川に流れます。こうしたプロセスの間にちりやほこりは取り除かれ、また水に溶けている化学成分にも変化がおきます。このように、森林には降ってきた雨水の水質を調整する機能が備わっていますが、この機能は特に土壌の中で強く働きます。

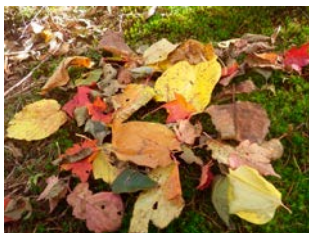


図2 森林土壌の表面に積もる落葉

これらをエサや住み家にする動物や微生物が土壌の生態系をつくっている。

森の土壌に目を向けると、落ち葉や枯れ枝が積み、それらをエサや住み家として利用する動物(ミミズやトビムシなど)や微生物(菌や細菌)が数多く生息していて、「生態系」を作り上げています(図2)。こういった土壌の生態系が、森林の水質調整の機能に大きくかかわっていることがわかってきました。

森の機能を守ってゆくために

森林には、水質を調整する機能の他にも、木材生産はもちろん、生物多様性の保全や治山・治水など、さまざまな機能があります。森が持つこれらの機能を、劣化させることなくどの様に維持してゆけばよいのか、森の管理方法を考えることが課題になっています(図3)。そのためにも、森が持つ機能がどの様に発揮されるのか、そのメカニズムを解明することが重要です。



図3 間伐管理された人工林で土壌を調査する

歯磨きのフッ素は 水処理が必要なのか？



桑原 智之 教授

キーワード

水処理、吸着、地下水、有害イオン、含水酸化物



少しなら有用だけど、たくさんだと有害

みなさんは歯磨きをちゃんとしていますか？ ご存じのように、フッ素は虫歯予防に有効です。ところが、フッ素は斑状歯という歯に斑点ができる病気も引き起こします。例えば、フッ素の入った地下水を恒常的に飲まざるをえない一部の開発途上国では、虫歯が少ない代わりに斑状歯が問題になっています。要は程度の問題なのですが、フッ素のようにヒトにとって少しなら有用（必須）だけど、過剰だと有害になる元素はたくさんあります（セレン、クロム、亜鉛……）。したがって、こういった元素を過剰に摂取するリスクを低減するためには、地下水や排水の水処理技術の向上がとても重要になります。

日本の地下水は安全なのか？ 研究内容は？

日本の地下水には、自然由来の（地質に影響する）有害イオンとしてフッ素やヒ素等が含まれることがあります。自然由来のため原因を取り除くことは難しく、利用するのであれば水処理が必要です。排出するときには、例えば天然温泉でもフッ素やヒ素等の排水基準を満たす必要があります。とはいっても、その濃度は薄いので、安価で処理するのはなかなか難しいのが現状です。そこで、私たちは低濃度の有害イオンを除去するための新しい「吸着剤」の開発に取り組み（図1）、これまでにフッ素とヒ素の吸着剤を開発してきました。



図1 吸着剤の合成風景

金属元素の組み合わせの妙

身近な吸着剤では、水分を吸着するシリカゲル、臭いを吸着する炭などが有名です。私たちは、単一金属元素では吸着特性を変えるのが難しいので、複数の金属の含水酸化物を組み合わせた吸着剤（複合含水酸化物）に注目しています。金属元素を複数組み合わせると、組成に応じて吸着量が変化し、また陽イオンや陰イオン、有機物などへの選択吸着性も変化するので、アイデアしだいで新しい吸着剤が作れます。今後は実際の水処理を想定した評価（図2）も行い、皆さんと一緒に世界中の人々が安心して水を利用できるように貢献したいと考えています。



図2 カラムを利用した吸着試験

里海 ～陸と川と海をつなぐ生態系と人間の共存～



山口 啓子 教授

キーワード

里海、宍道湖、中海、二枚貝、水生生物



里海の危機

昔から私たち人間は、川や湖や海から魚介類や海藻といった恵みを受け取って来ました。人が手を加えることにより豊かになった海を「里海」といいます。しかし、産業が盛んになる一方で、水質汚染や水辺の開発・人工物の建設などにより、水域生態系は大きな影響を受けました。島根大学の近くにある宍道湖や中海でも、干拓淡水化や河川改修の計画がありました。特に中海では改変が著しく、水域環境が悪化し、漁業は衰退しました。私の研究室では、水域の環境とその変化を科学的にとらえ、豊かな里海をめざす研究をしています。

見えにくい水面下の世界

水の中は人間の目に見えにくいいため、水域の悪化に気がついたときには、しばしば深刻な状態になってしまいます。豊かな里海を取り戻すための第一歩は、見えにくい水域の環境やその変化を科学の力で読み解くことにあります。しかし、水質は時々刻々と変化し、その過程や過去の環境を詳しく知ることは難しいのが現実です。それをひもとく情報の源が生物にあります。

大事なことは生物が教えてくれる

同じ水域でも環境によって生息する生物の種類が異なります(図1)。この環境指標性を利用して、その場所に住む生物の組み合わせの変化から、環境がどのように変わったかを調べることができます。さらに、貝殻や魚の耳石などには、その生物の成長とともに経験した環境が記録されています。図2に示すスズキでは、耳石の中心から外側へと酸素安定同位体比の変化を測定した結果、成長に伴い季節で水域を移動したことを読み取ることができます。生物が示す環境や、生物からどのような情報を読み取ることができるのかを明らかにし、それをもとに、里海を取り戻すにはどのような条件を整えれば良いのか、新しい糸口を探っています。

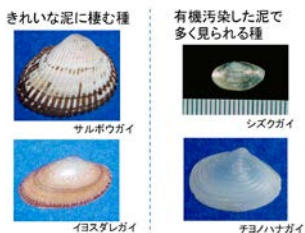


図1 内湾の泥底に棲む二枚貝の代表種

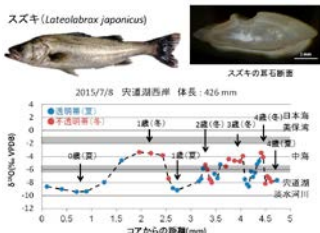


図2 魚の耳石に刻まれる生息環境情報

安定同位体から見た 汽水域の食物連鎖



倉田 健悟 准教授

キーワード

汽水域、安定同位体、食物連鎖、
底生動物、水圏

14 海の豊かさを
守ろう



汽水域の複雑な食物連鎖を安定同位体比から解き明かす

河川と海の境界である汽水域では、河川から運ばれる陸起源の有機物、海藻類由来の有機物、水中の植物プランクトンなどの複数の餌資源があるため、動物の餌利用が複雑です。

ところで、地球上には異なる質量数を持つ元素（安定同位体）があります。炭素は質量数12の安定同位体が約99%ですが、質量数13の安定同位体が約1%だけ存在しています。動物の餌利用においてこれらの比には興味深い現象が見られます。陸上植物の光合成で作られる有機物と、水中で光合成を行う植物プランクトンの有機物では、炭素安定同位体比が異なっていて、これらを餌とする動物の炭素安定同位体比にも反映されるのです。この性質を用いて、宍道湖～境水道の各地点で餌となる物質と底生動物の食物連鎖を調べてみました。

宍道湖と中海の底生動物は何を食べているか？

宍道湖と中海の両方で採集されたヤマトシジミ、巻貝のカワグチツボ、カワザンショウガイは、炭素安定同位体比の値の範囲が広いことが分かりました（図1）。宍道湖から中海まで幅広い塩分に対応して、水中の懸濁物や湖底の堆積物の炭素安定同位体比が変化していたことから、懸濁物をろ過して摂食するヤマトシジミや堆積物を餌とする巻貝の値も範囲が広がったと考えられます。

中海の揖屋地点で採集されたホトトギスガイは、炭素安定同位体比が他の地点より高い傾向がありました。水中で生活するコアマモは、陸上植物や植物プランクトンよりも高い炭素安定同位体比を示すことが知られています。付近にコアマモの群落があったことから、この影響を受けた有機物がホトトギスガイの餌となっている可能性が考えられました。

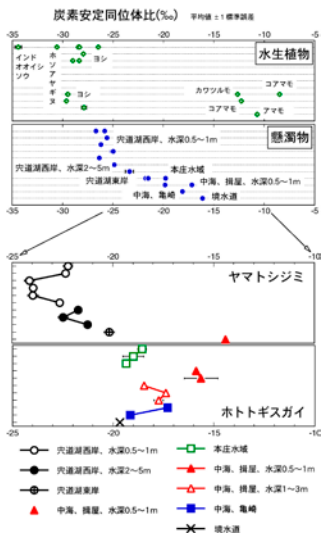


図1 二枚貝類とその餌となる物質の炭素安定同位体比の値

汽水域生態系の変化を知らせるシグナル

宍道湖や中海の底生動物は、その場所の影響を強く受けていると言えます。湖岸の改変や流動の微妙な環境変化が、食物連鎖を通じて底生動物に影響する可能性を調べていく必要があるでしょう。



佐藤 邦明 准教授

キーワード

土壌、水、微生物、生態系、ものづくり



世界は落ち葉であふれない

陸上では毎年のように草や木が生長し、落葉や枯死によって土壌へ還って行きます。にもかかわらず、世界が落ち葉で埋もれないのは土壌微生物によって分解されているからです。そう考えると、土壌には少なくとも植物生産と同等かそれ以上の分解能力があると考えられます。私はこのような土壌の分解機能を利用した水質浄化技術の研究を行っています。土壌による水の浄化は欧米や途上国で広く行われていますが、地下水汚染や病気の原因になるなど問題もあります。土への水のしみこみややすさなど、土壌の水質浄化能は場所によって異なり、浄化能の低い土壌もあります。

土の環境浄化機能を強化する

上記の問題を解決するため、多段土壌層法と名づけた技術の開発を行ってきました。多段土壌層法は、土壌ブロックを交互に積層しブロック間に粒径が大きく通水性が良い資材を配置した構造を持ちます(図1左上)。従来、問題点であった目詰まりに対して有効で高速処理が可能となり、一般家庭や公園などで一部実用化されています。これまでの研究から、ブロックサイズを小さくするほど土と水が接触しやすくなり、浄化性能の向上することが示されてきています。そこで、究極まで土壌ブロックを小さくすることをコンセプトに、土を造粒して新たな浄化資材を作り出そうとする研究も行っています(図2)。

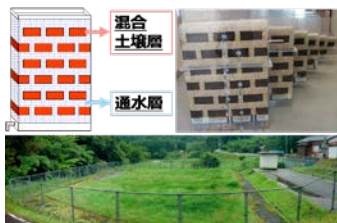


図1 多段土壌層法の概略図(左上)と室内実験用のモデル装置(右上)です。下の画像は集落排水処理で実際に使用されている装置です。



図2 攪拌機や造粒機で作成した土壌の粒状物です。土壌分野ではこのような土粒子の集合体を団粒と呼びます。様々な資材も混ぜ込んで、水質浄化能を高めます。

浄化の主役である微生物をコントロール

最終的には、高い水質浄化能を持つ微生物群が増えるような土壌環境を作り出したいと考えています。ちなみに、目詰まりが起こる大きな原因は微生物が自身の周りに出す生物膜(例えば川底の石のぬるぬる)の肥大化です。少し強引ですがこれを微生物の「衣」と捉え、水質浄化に適した微生物にとっての「エサ」や「土壌という住環境」を、つまり衣食住を一緒にコーディネートしてみませんか？

植物を育てる光を デザインする



谷野 章 教授

キーワード

植物、栽培、光、
植物環境フォトニクス

2 目標を
ゼロに



植物にはどんな光があたっているのだろうか

植物を栽培するためには光が必要です。屋外では太陽光が植物を照らします。植物が受け取る光は刻一刻と変化します。植物と太陽の間に雲がかかると、植物が受ける光は弱くなります。快晴であっても、地球が回転するため、1個体の植物の表面で直達光があたる場所とあたらない場所が次第に移動します。隣に別の植物がいれば、その植物の影に入ることもあります。夜には、植物と太陽の間に地球が位置するために太陽光が届きません。

植物は温室内でも栽培されます。温室内の植物には、屋外よりも弱い光が届きます。この場合もやはり、植物が受ける光は刻々と変化します。植物と太陽を結ぶ直線上に温室のパイプが位置するときには、パイプの影が植物にかかります。

太陽光が届かない室内で植物が栽培されることもあります。このような状況では、照明装置が使われます。光源と植物の位置関係はほぼ一定ですが、植物が成長すると、その成長につれて、光源と植物の位置関係は次第に変化します。光が照射される時刻や継続時間は、人間によって決められます。太陽と植物の距離に比べて、室内での光源と植物の距離は極端に短いため、一つの光源が植物全体を等しい強度で照らすことは困難です。光のスペクトル(感覚的には色)は光源によって決まります。普通それは太陽光のスペクトルとは違います。

温室や室内の光をデザインする

温室や室内で植物を栽培する場合、植物が受ける光は屋外の光とはかなり違います。温室(図1)や屋内(図2)で植物にどのような光をあてるかを考え、そのような光を実現する仕組みの考案や装置の開発を行っています。



図1 屋根に太陽電池を貼った温室内の光の解析



図2 LED光源から光を受けるワサビ

目標

日々の地道な勉強で身につけた知識を活用して社会参加する経験を学生の皆さんに提供したいと思っています。

汚染物質は常に 変化しています

キーワード

水生汚染、生態毒性学、
多環芳香族炭化水素、
マイクロプラスチック、溶存有機物

14 海の豊かさを
守ろう



長門 豪 准教授

汚染物質は常に変化しています

ほとんどの汚染は陸生起源ですが、必然的に水生環境に蓄積します。そこで微生物に代謝され、潜在的に有害な汚染物質になることがあります。私の研究の目的は、これらの変換が、一般的な汚染物質の環境分布、生体内蓄積、毒性にどのように影響するかを理解することです。私は特にナフタレンなどの多環芳香族炭化水素 (PAH) とマイクロプラスチックに焦点を当てています。

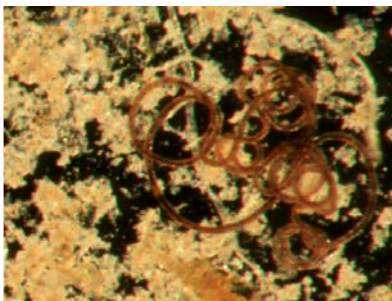


図1 繊維などのマクロプラスチックは、水生環境に存在しています。

微生物は汚染物質の変換原因の1つです

PAHは燃焼プロセスからの一般的な汚染物質であり、有毒成分を含みます。水環境では、PAHは微生物に代謝されてさらに毒性の高い化合物になることがあります。これらの変換がどのように発生するか、およびその環境濃度についてはほとんど研究されていません。私の目的は、日本海周辺の水、堆積物、貝などの生物中のPAH濃度を理解することです。

また、海洋環境におけるマイクロプラスチックの環境動態も調べています。

特に、微生物がどのようにプラスチックに付着し、これがどのように水生生物への毒性に影響するかを理解することに興味があります。微生物によって形成されたコロニーは、水生環境におけるプラスチックの挙動にどのように影響するのでしょうか？

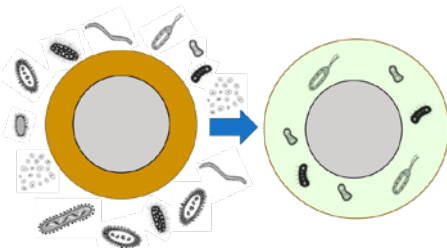


図2 環境中のプラスチックには微生物が付着しており、これは水生生物に対するプラスチックの毒性に影響を与える可能性があります。

今後PAHやプラスチックはますます問題になります。

各国が開発を進めるにつれて、PAHやプラスチックなどの汚染物質が環境汚染の原因となることが予想されます。汚染物質の変換における微生物の役割を理解することは、汚染物質が環境に入ったときに実際に何が起るかを理解する最初のステップです。

風が砂を運ぶとき ～砂丘が語る地球のダイナミズム～



劉 佳啓 准教授

キーワード

気候変動、飛砂、砂丘、風洞、防砂

13 気候変動に
具体的な対策を



なぜ砂丘は動くのか？

みなさんは、風が砂を運ぶ様子を見たことがありますか？実は、砂丘は少しずつ形を変えながら移動しているのです。こうした自然現象の背景には、風が砂粒を運ぶ「飛砂(ひさ)」という現象があります。私は、鳥取砂丘などの実際の砂丘環境をモデルに、風によって砂がどう移動するのかを研究しています。砂丘が動く仕組みを理解することは、農地や住宅地への砂の被害を防ぐためにも重要です。



図1 鳥取砂丘と風による砂移動の様子

風洞実験で「風と砂」の関係を解明！

この現象を詳しく調べるために、自分で設計・製作した小型の「風洞装置」を使って、人工的に風を吹かせる実験を行っています。風洞の中では、さまざまな地形や植物、石(レキ)を配置して、風が吹いたときに砂がどう舞い上がるかを観察できます。

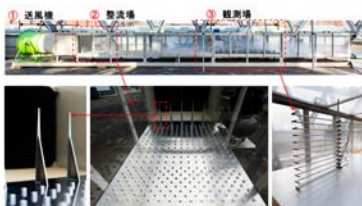


図2 風洞装置の構成

さらに、どの方向にどれくらい砂が飛んだかを計測するために「無指向飛砂計測装置」も開発し、特許も取得しました。例えば、ある高さでは飛砂全体の20%が通過していることなど、砂の動きには意外な法則があるのです。

風のふるまいを、未来へつなげよう！

この研究は、将来の環境保全や防砂対策に役立つだけでなく、気候変動によってますます影響が大きくなる「砂の動き」を予測するヒントにもなります。今後は、こうした研究をさらに進めて、世界中の乾燥地の砂害対策に貢献したいと考えています。高校生のみなさんも、ぜひ「風と砂」のふるまいを科学の目で見てみませんか？研究室

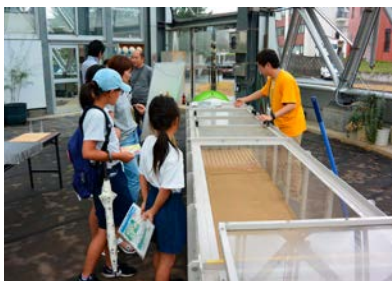


図3 学生と一緒にいる風洞実験の風景

では、学生と一緒に砂丘での実験や観測も行っています。自然を相手にしたフィールド研究の面白さを、ぜひ一緒に体験しましょう！

施設栽培に太陽光発電を



李 治 助教

キーワード

温室、太陽電池、
再生可能エネルギー、遮光

7 エネルギーをみんなに
そしてクリーンに



なぜ施設栽培に再生可能エネルギーが必要？

近年、様々な高度な環境制御技術（照明、冷暖房、計測、通信など）を温室などに導入して、植物の栽培を行っています。そのため、野菜や果物が周年的に収穫できるようになりました。例えば、冬でもイチゴを食べられるようになりました。しかし、環境制御のための設備は、化石燃料や電気エネルギーを大量に消費します。その結果、収穫した野菜や果物の値段が高くなります。栽培施設で太陽光発電などの再生可能エネルギーの利用を増やせば、地下資源由来のエネルギー消費量の割合を減らすことができます。

植物生産と太陽光発電の両立へ

私は太陽電池を使って、温室外の天気条件によって自動的に受光角度を変える自動遮光システム（図1）を開発しています。扱っている太陽電池は、半透過型の太陽電池（図2）です。この太陽電池は、光を一定の割合で透過させることができます。多数の非常に小さい太陽電池素子を2枚の強化ガラスで挟んでできています。植物の生長にも太陽光発電にも日光が必要ですが、この太陽電池を温室の屋根に設置すれば、太陽電池の影が植物への日光を妨げることなく電力生産できます。夏は温室中の温度の上昇を防ぐために適度に遮光することが多いです。遮光資材として半透過型太陽電池を使えば、植物生産と電力生産を両立させることができます。



図1 半透過太陽電池を利用した温室自動遮光システム

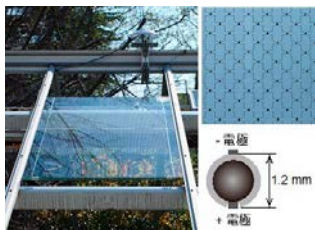


図2 遮光資材に利用できる半透過太陽電池と太陽電池素子

持続可能な温室栽培環境を作ろう！

農業分野で、このような新型の太陽電池の利用を拡大できれば、地下資源由来のエネルギー消費量の割合を減じつつ、再生可能エネルギーの割合を増やして、持続可能な温室栽培の実現が期待できます。みなさんも再生可能エネルギーと農業生産について研究してみませんか。

水を送る施設のための 補修・補強工法の評価



石井 将幸 教授

キーワード

水路、管路、補修・補強、
コンピュータシミュレーション

2 削減を
ゼロに



水が出るのは当たり前？

水道の蛇口をひねれば、きれいな水が出てきます。流し台に水を流せば、どこかへ流れていきます。初夏になると田んぼには水が張られ、稲がすくすくと成長していきます。

皆さんも毎日の生活の中で、たくさんの水を当たり前のように使っていると思います。必要なところに必要な水を送り、逆に不要な水をきちんと回収するための仕組みを作るために、これまで大変な苦勞がありました。しかしその苦勞に関わらず、この仕組みが危機に瀕しているのです。

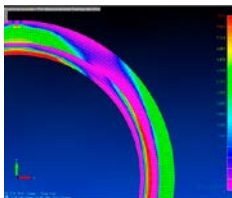


農業用水で満たされた水田

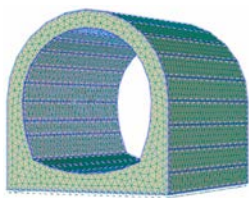
水路や管路の補修・補強

水道水や下水を送るための管路（パイプのことです）や、農業用水を送るための水路には、何十年も前に作られたものがたくさんあります。いつまでも使い続けることができれば良いのですが、残念ながらそれはできません。どこかのタイミングで、新しいものと交換するか、修理をしてやる必要があります。水を流せなくなると多くの人に迷惑がかかるため、壊れるまで待つことはおそらく許されません。

この修理（補修・補強といいます）をするにあたっては、補修によってどれくらい長持ちさせられるのか、補強によってどれくらい強くできるのか、などを前もって計算しなければなりません。今まで使ってきた管路や水路の状況が様々なので、その計算は大変難しいのです。また補修・補強を行うタイミングの判断は、計算よりずっと困難です。しかし実際の水路を調査し、またいろいろな計算方法を試してきた結果、実際の現場で使ってもらえるような判断基準や計算方法ができてきました。



補強した管路の強さを推定するための
コンピュータシミュレーション



トンネルの補強効果を確認するための
三次元データ

当たり前を作ろう！

日常生活での「当たり前」は、たくさんの人の努力で作られています。皆さんも世の中を支える技術者になるための勉強を通して、その「当たり前」を作る側に回ってみませんか？ たとえ誰もほめてくれなくても、すばらしい充実感を得られる仕事が皆さんを待っています。

流域の水循環と水質浄化



武田 育郎 教授

キーワード

流域、水質、リン

2 目標を
ゼロに



人口減少なのに水質は良くならないの？

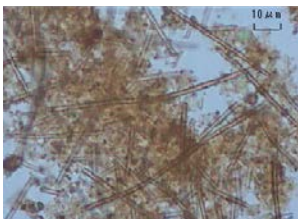
現在、湖沼などの閉鎖性水域における水質汚濁が問題となっていますが、日本を代表する汽水湖である中海・宍道湖でも、これまでに環境基準をクリアしたことがなく、夏になると発生することもあるアオコや、最近では水草の異常な繁茂が大きな問題となっています。島根県東部の宍道湖に流入する最大の河川である斐伊川では、週1回の頻度での水質測定を継続していますが、水質の改善が明確にみられていません。人口減少にともなって生活排水や肥料の投入量などは減少し、下水道や浄化槽の対策は進んでいるのに、なぜでしょうか？



水質調査

リンの循環が救世主？

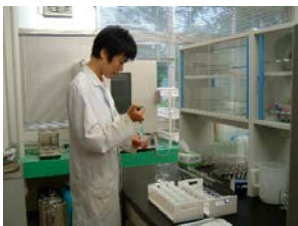
いろいろと調べた結果、山林の荒廃や農地の構造的な変化などが原因とわかったのですが、肥料の主要な成分の1つであるリンの循環が救世主になるかもしれません。しかしリンはもともと循環に乏しい元素です。陸域から水域に流れ出したリンが再び陸域へ戻る経路は、海鳥の営巣地でのフンの堆積（南米ではグアノという肥料になる）などに限定され、河川や湖で拡散したリンは資源として利用されていません。こうした中で研究室では、鉄バクテリアと木質バイオマスを使って自然水域からリンを回収する方法を考えています。日本はリンのほぼ全量を輸入に頼っていますが、リン資源（リン鉱石）の生産はごく少数の国に偏っており、今後50～100年で枯渇すると考えられていますので、とても重要です。



鉄バクテリア

広い視点で課題解決！

もともとは農業水文学（農業用水の利用）や水文学（すいもんがく、降水や河川流量）が専門です。しかしこれらにとどまらず、水質化学、土壌肥科学、造林学、作物学、微生物学なども関連しますので、より広い視点で勉強することができます。



実験風景



上野 和広 准教授

キーワード

農業水利施設、
ストックマネジメント、
補修・補強、減災・防災

11 住み続けられる
まちづくりを



農業を支える基盤の老朽化

農業を行うためには水が必要で、水は雨として地上に降り注ぎますが、農業の都合に合わせて降ってくれるわけではありません。必要な時に必要な量の農業用水を農地へ供給するためには、水を貯める施設、水を運ぶ施設、水を取り入れる施設などの農業水利施設(図1)が不可欠です。これ



図1 農業用水を貯めるため池・農業用水を運ぶ水路

までにたくさんの施設が整備され、農業用水の安定供給を通して農業を支えてきましたが、長期間の供用に伴うそれら施設の老朽化が問題になっています。

施設の健康診断、老朽化の予防、治療

今ある施設を大切に使用していくためには、施設の健康診断、老朽化の予防、老朽化した施設の治療が必要であり、研究を通して関連する技術開発を行っています。治療に関する研究では、コンクリート構造物に対する効果的な補修・補強手法について取り組んでいます。自然環境中で長期間使用されたコンクリートでは、どのような品質の変化が生じているのか、どのような方法で補修・補強を行うのが効果的か、といった視点で研究を行っています。長年水と接していたコンクリートで生じるカルシウム(Ca)の溶脱が、補修・補強による効果を低減させることなどが明らかになりました(図2)。施設の老朽化に関する実態把握と対応策の開発を通し、農業を支える基盤の継承へ貢献できればと思っています。

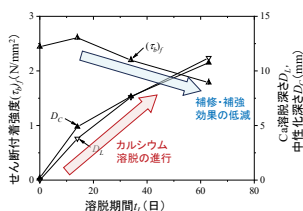
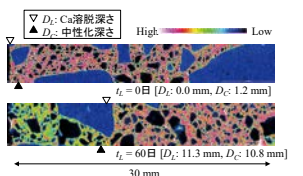


図2 Ca溶脱に伴う補修・補強効果の低減

あって当たり前を守る

インフラや社会基盤と呼ばれるものは、我々が生活する中で「あって当たり前」のように感じられるかもしれませんが、それら施設が健全な状態で保たれている影には、関連する技術開発と現場で活躍する技術者の姿があります。農業を支える基盤の保全に向け、皆さんもその取り組みの一端を担ってみませんか？

地域環境を土とGISで守る



木原 康孝 講師

キーワード

土壌、GIS (地理情報システム)、
地域環境、災害

2 削減を
ゼロに



土～地域環境を支える縁の下の力持ち

すべての人が「土」に支えられた空間で生活しているにもかかわらず、汚れてしまう、洗練されていない等々「土」のイメージはあまり良くありません。悪い印象のみならばまだしも、本当は「土」が建物だけでなく、縁の下の力持ちとして地域環境を支えている「かけがえのない地域の財産」であることを理解している人も残念ながら多くありません。図1のような地域で農業を含む地域の様々な循環(水・物質・熱)を研究していると、土が環境問題の「扇の要」の役割を果たしていることを日々実感しています。



図1 地域は土で支えられている

GIS～地域環境を視覚化

近年、豪雨による災害が頻発しています。地域に降った雨は土の中に浸透し、河川へ流出していきます。このサイクルの中で土が限界を超えると様々な災害が起こってしまいます。そのため日頃から自分の地域に降った雨の経路を理解しておく必要があります。また、土の重要性がなかなか理解してもらえない理由はあまりにも身近な存在ということと、土の中の現象は目に見えないということが挙げられます。視覚化するツールとしてGIS(地理情報システム)を活用します。地域の等高線図を眺めても地形を把握することはなかなか難しいですが、GISならば3Dで表現することも可能です。図2の青線は溪流、赤線で囲まれた領域が河川流域です。これによって地域における土の中の水の動きを理解することが容易になります。

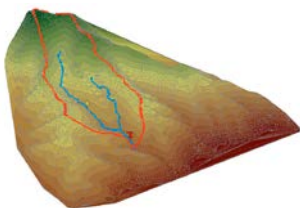


図2 地域環境をGISで視覚化
島根大学・三瓶演習林の調査流域

地域環境のお医者さんになりませんか

地域環境の縁の下の力持ちである「土」を学び、移動する水や物質、熱などの移動現象をGISで視覚化することによって地域環境を保全することができます。

地域環境を守る＝地域のお医者さんになりませんか。



図3 広い農地で土壌サンプリング

土砂災害リスクの 低減に向けた再現実験



佐藤 真理 助教

キーワード

地盤工学、土砂災害、豪雨、堤防、
ため池

12 つくる責任
つかう責任



山地斜面内の地下浸透流による土砂災害への影響について

島根県内ではまさ土が広く分布し、山間部で急斜面が多いことから土砂災害リスクが高いと考えられます。本研究では豪雨時地下浸透流による災害発生リスクについて、模型実験と浸透流解析の両側面から研究を進めています。

模型実験による土砂流出・地中空洞形成実験

アクリル製で前面から観察可能な模型土槽を作成し、下部に水や土砂の流出口を設け、①地中空洞の形成実験(図1)や②粒径の異なる二層地盤を有するときの内部侵食実験を実施しています。地中空洞形成実験では、地中空洞が断続的な浸透流に伴う土砂流出で徐々に拡大し、上部へ進展することで陥没が引き起こされるプロセスが示されました。②内部侵食実験に関しては、粗粒土と細粒土の二種類の異なる地層が重なった模型地盤を作成しました。これは表層の腐植土から内部の透水性が高い地盤へ水が浸透する様子を模擬しています。その結果、浸透流により地盤強度が局所的にばらつき弱部の発生する可能性があることや、粒度分布が浸透前後で変化することが示されました。

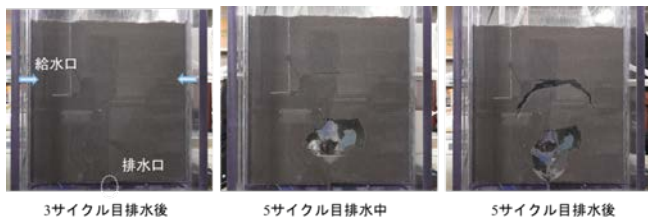


図1 模型実験による空洞形成の様子

今後の展望と高校生の参加の誘い

これらの実験は小規模で地道なものです。地盤は未だに未解明な部分が多く、土砂災害が起こる原因を突き止めることは現代社会で大変役に立ち、また必要とされていることです。

高校生のみなさんは様々なことを学習していく時期であり、まずはこの学問分野の基礎的な事項の習得をしてもらえればと思います。その後に簡単な実験から参加してもらい、土砂災害のリスクを減らすにはどうしたら良いのか、また関連して実際の社会で建造される構造物がどのような仕組みで作られているのか、作られた構造物を守り維持するにはどうしたら良いのか、皆さんに勉強してもらいながら、私たちも一緒に考えていくことが出来れば嬉しいです。また皆さんの斬新な発想が、研究の役に立つこともあるかもしれません。色んなことを積極的に学生らしい素直な視点で学んでももらえれば良いと思います。

いい土はどんな音がするか？



深田 耕太郎 助教

キーワード

土壌、音波、空気、通気性、湿害

15 陸の豊かさも
守ろう



いい土とは

土を研究する人の視点は多様です。ミミズ、作物、栄養、微生物、地盤、あるいは地球など。私の視点は空気です。土壌中に十分な空気があり、スムーズに大気と交換できる状態かどうかは、水分や栄養と同じぐらい植物の生育にとって重要です。ところが、土壌の通気性を知ることは簡単ではありません。土を採取する必要があり、そのために現地の状態を変えてしまうという問題があるのです。そこで私は土に音を当てて調べる方法を開発することにしました。

土壌の音色

音は空気の振動です。音を土壌にあてると一部は土壌に入り、残りは反射します(図1)。実験した結果、反射した音の中に土壌の通気性に関する情報があるということが分かりました。通気性が変わると、周波数と音の大きさの関係が変化します。測定方法やデータの解析方法を追求していけば、人体の超音波検査のようなことが土壌に対してできるようになるかもしれません。



図1 土壌に音を当てる実験のイメージ
スピーカーから音を出し、マイクで音を拾う。

土と人類の未来

通気性は湿害という生育障害と関係があります。土壌中の水分が多いままだと空気が交換されず、酸欠状態になります。土壌の音響測定技術は、土壌の水分と空気を適切に管理するのに役立ちます。

「人は土から離れては生きていけない」と言った人がいます。健全な土壌は人類の未来には欠かせません。皆さんと一緒に土壌について研究する日が来ることを楽しみにしています。調査の様子を図2とQRコードからご覧下さい。



図2 調査の様子
教員と学生と一緒に土を採取している。

調査の様子 YouTube
<https://youtu.be/6eUq3BqJBmE>



附属生物資源教育研究センター

当センターは演習林（松江、三瓶、匹見）、農場（本庄、神西）、臨海施設（隠岐）をフィールド拠点として、専任教員を配置し、兼任教員・技術職員とともに森・里・海の自然を活かした教育及び研究活動を行っています。

森林科学 部門

森林科学部門は森林を対象にした教育研究活動の場である演習林のマネジメントを担当しています。森に興味のある小中高生、実習三昧の大学生、データを取らなきゃいけない大学院生、そしてもちろん研究者のみなさんWelcomeです！

農業生産科学 部門

農業生産科学部門では作物学、土壌微生物学、植物栄養・土壌学、蔬菜・花卉・果樹園芸学、および園芸利用学を専門とする専任と兼任の教員が配置されており、このメリットを生かして多様な専門分野に対応した教育・研究を行っています。

海洋生物学 部門

海洋生物学部門は、日本海の離島・隠岐の島（島後）にあります。島の周辺で採集・漁獲される多様な海の生物を使った調査・実習を通して、教育研究活動を行っています。松江の高校との合同実習など、様々な学校・大学の实習活動にもご利用いただいています。

キーワード

森里海連環、生産と環境、環境モニタリング、
高品質農産物、離島生態系



山下 多聞 准教授

キーワード

樹木、根系、土壌有機物、物質循環



森林の基礎生産

森林といえば樹木が主役です。樹木がなければ森林じゃない。樹木があってこそその森林。みなさんご存じのように樹木など緑色植物は光合成をします。光合成は十分な光の届く樹冠に広がる葉で行われます。葉は、そびえ立つ幹、そして幹から伸びる枝にみごとに配置されています。しかし、幹、枝、葉を支えるのは根です。根から水や養分が上空の葉に送られます。たとえ熱帯林の高さ50mを超えるような巨木でも根から葉へと送られます。根は、土壌中に存在する水および無機物質を植物体内へと取り込みます。根が取り込む水のもとには降水、無機物質のもとには土壌鉱物の風化産物です。緑色植物はこれらと大気中の二酸化炭素から有機物を作り出します。光合成で作られた有機物が地球生態系の究極の駆動力（ドライビングフォース）になります。



三瓶演習林の黒色土断面

生態系での再循環

光合成で作られた有機物も老廃物は切り離して地表に捨てられます。枯葉や枯枝です。枯葉や枯枝は地表で土壌動物や土壌微生物によって分解されます。この過程で枯葉枯枝から大気に二酸化炭素が放出されます。また、この過程で枯葉枯枝から土壌に腐植が供給されます。腐植は炭素だけでなく、窒素なども含む難分解性物質です。難分解性有機物である腐植は土壌中に蓄積します。土壌の表層部分は腐植が蓄積し暗褐色に染まります。しかし、腐植は土壌微生物により徐々に分解され腐植を構成する無機物質を土壌中に放出します。放出された無機物質は表層土壌に展開している根系に吸収され再び光合成に利用されます。

腐植はどこへ

表層土壌はもちろん重要です。何故なら、多くの腐植が蓄積し、多くの根が分布し、多くの土壌生物が活動しているからです。では、森の土の深いところでは何が起きているのでしょうか。知りたくないですか？

安全でおいしいお米を作る技術



松本 真悟 教授

キーワード

コメ、ヒ素、カドミウム、土壌、鉄、ケイ酸



お米に含まれる重金属濃度の国際基準値が制定されました

毎日食べているお米ですが、誰もが安全でおいしいお米を食べたいですね。特に安全性は私たちの健康に直結しますから、主食であるお米にはとりわけ関心が高いと思います。近年世界的に食の安全性が求められるようになり、FAO (国連食糧農業機関) やWHO (世界保健機関) が中心となって、お米に含まれるヒ素やカドミウムなどの重金属濃度の国際基準値が制定されました。ヒ素やカドミウムは岩石、土壌、植物体などに普遍的に存在する元素なので、非汚染地域でも、ヒ素やカドミウム濃度を低減する水稻栽培技術が求められるようになっていきます。

土壌中で相反する挙動を示すヒ素とカドミウム～あちらを立てればこちらが立たず～

お米は水田で作られます。水田とは土地に水を張って湛水状態にする利用形態です。田植え後しばらくは湛水 (たんすい) 状態を保ち、時々水を抜いたり入れたりして管理し、収穫2週間くらい前から水を抜いて (落水) から収穫します。水田ではこの湛水状態と落水状態で、ヒ素とカドミウムの形態が変化します。湛水状態ではカドミウムは水に溶けない硫化カドミウムとして存在するので水稻には吸収されません。一方落水状態ではカドミウムイオンとなって、吸収されやすくなります。ヒ素は湛水状態で三価の亜ヒ酸として存在して水稻に吸収されやすくなりますが、落水状態では五価のヒ酸に変化して吸収されにくくなります。カドミウムを吸収させないように落水期間を長くすればヒ素が吸収されやすくなります。ヒ素を吸収させないように落水状態を長くすればカドミウムが吸収されやすくなってしまいます。あれれ、どちらも水稻に吸収してほしくないのに…… (図1)。

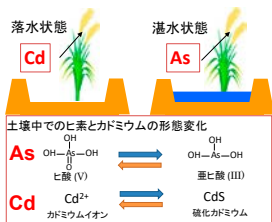


図1 水田の水管理状態の違いによるヒ素 (As) およびカドミウム (Cd) の形態変化

肥料や水管理でヒ素とカドミウムを両方低減できる！

ヒ素は土壌や根表面の鉄に吸着されやすい性質を持っています (図2)。また、ヒ素はリン酸やケイ酸と化学形態が類似しているため、その吸収反応が競合します。ですから、これらの肥料を多く施用するとヒ素の吸収を抑制できるかもしれません。カドミウムはアルカリ性になると水に溶けなくなるので、吸収が抑制されます。このように、肥料と水管理を工夫することでヒ素とカドミウムを同時に低減する可能性があります。皆さん、土壌と肥料の性質や化学を勉強して安全なお米を作りましょう！



図2 水稻の根表面に形成される鉄被膜にヒ素が吸着される

ゲノムからみる イカの寿命の秘密



吉田 真明 教授

キーワード

進化、ゲノム、遺伝子、海洋、コンピュータ

14 海の豊かさを
守ろう



自殺的生殖の制御機構

イカ・タコの仲間（頭足類）は、ほとんどの種が1年で成熟し、生殖後に一斉かつ急激に死ぬという‘自殺的生殖’と呼ばれる特異な寿命特性を示します。繁殖後の親個体は、摂餌の有無に関わらず急激に筋肉が退縮し、やせ衰えたスペントと呼ばれる様子になります。自殺的生殖では、繁殖後に急激に老化し、衰弱が進むように見受けられます。

ダイオウイカ3年とヒメイカ3ヶ月

そんなイカ・タコの仲間でも異なる寿命特性をもつ種があります。ヒメイカとダイオウイカがそれぞれ頭足類の中で短命であるものと長命であるものの両極端で、ダイオウイカは成熟におよそ3年かかり一度きりの自殺的生殖を行うのに対して、

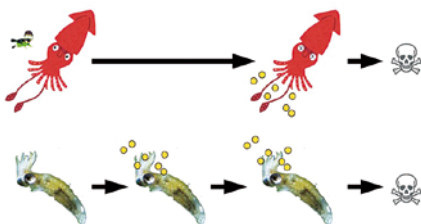


図1 ダイオウイカとヒメイカの異なる繁殖・寿命特性

ヒメイカはおよそ3ヶ月間の寿命の間、間欠的に産卵を続けます。これは進化の過程で寿命特性が変化したもので、ダイオウイカはゆっくり成熟するのに対して、ヒメイカでは生殖と老化は異なることを示唆しています。

新しいゲノム海洋生物学

これまで老化・寿命研究においては、線虫、ショウジョウバエ、マウスやラットといった少数のモデル生物が中心となって行われてきており、海洋生物ではどのような遺伝子が関与しているかほぼ未知の状態ですが、全ゲノム解読が徐々に進行しており、自殺的生殖など特徴的な生態や戦略に関わる遺伝情報を得るエコゲノミクス研究が可能になってきています。ダイオウイカの研究サンプル入手は容易ではありませんが、近年日本海で漂着が



図2 アクアスで行われたダイオウイカ公開解剖の様子

続いており、各地の水族館と協力して解析に用いる十分なサンプルの入手に成功しています。日本海の名物であるダイオウイカを用いて、自殺生殖のメカニズムと遺伝機構を解き明かします。

頭足類の形態進化を 明らかにする



小野 廣記 助教

進化、発生、頭足類、イカ

14 海の豊かさを
守ろう



生物の多様性と進化

生物の持つ様々な姿や生態は長い進化の歴史の産物です。ある1個体の生物が成長して姿形が変わることが“進化”と誤解されることもあります。生物学的には生き物の集団が世代交代をして元の集団とは異なる形態や生態を持つようになることを意味しています。このような形態や生態の変化は遺伝的な変異によって起こります。私は頭足類（イカやタコ）を研究対象に、胚発生の過程を明らかにすることで形態進化を引き起こした遺伝的な背景を解き明かそうとしています。



図1 研究対象のヒメイカ

頭足類の発生的研究に貢献する小型イカの仲間

頭足類は軟体動物でありながら素早く泳ぎ、発達した眼や高い知能まで持っていることで有名です。しかし、これらの興味深い特徴がどのようにして進化してきたのかについては多くのことが分かっていません。その理

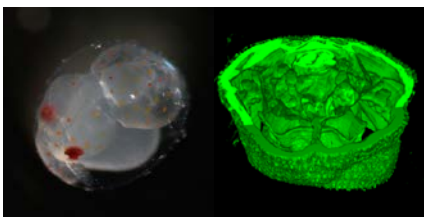


図2 発生中のヒメイカ胚と内部構造が見える3Dモデル

由のひとつとして、イカやタコは人工環境下での飼育・繁殖が難しく、進化・発生学的研究に必要な卵や胚を十分に得られなかったことが挙げられます。そこで、私は小型のイカ（ヒメイカ・ミミイカ）を用いることで、実験室内での飼育・繁殖に関する問題をクリアし、胚発生の研究や孵化稚仔の育成を行なっています。

頭足類の胚発生から進化の過程を考える

イカの様々な発生段階の胚が得られることは、研究の幅が広がることにもつながります。例えば、胚の断面の写真を重ね合わせることによって、これまで観察の難しかった発生途中の胚の内部構造を3Dモデルの作成によって可視化することができました。今後は、遺伝子の発現解析や編集技術を利用してより詳細な器官形成の全貌を明らかにしたいと思います。これらの研究を通して、他の軟体動物とは異なるユニークな頭足類の形態がどのようにして進化してきたかを解明できるかもしれません。

先銳研究部門



おいしい地域資源 ～ローカル発酵微生物～



児玉 基一朗 特任教授

キーワード

発酵食品、ローカル酵母、未利用地域資源、ものづくり、地域活性化

8 働きがいも
経済成長も



未発掘地域資源“ローカル発酵微生物”で地域の新しいものづくりを!

持続可能な地域社会の確立のため、イノベーション創出による地域活性化が求められています。それぞれの地域・地方に特徴的な地域食材は、地域振興の切り札として多くの自治体で活用が試みられています。私たちは、他との差別化、独自性確保のため、地域生息微生物もそれぞれの地域に特有な“地域資源”であると見なして、“ローカル発酵微生物(酵母、乳酸菌など)”の活用により、全く新しい地域製品が創出できると考えました。

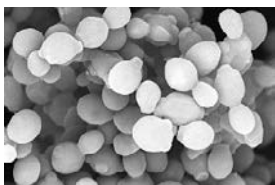


図1 ローカル酵母の電子顕微鏡写真

おいしい地域資源“ローカル酵母”

酵母は発酵の主役となる微生物ですが、“ローカル酵母プロジェクト”を進めるにあたり、特に、①ストーリー性(面白い・興味深い背景)と②新規性・希少価値(オンリーワン)の2点をキーワードとしました。その結果、二十世紀梨からの梨酵母、桜の名所からの桜酵母、さらに、ヒノキ酵母、オリーブ酵母、バラ酵母など、興味深い地域素材由来のローカル酵母を発掘・収集し、各地のブルワリー、蔵元、ベーカリーとクラフトビール、日本酒およびパンなどを共同開発して、市販化に至りました。また、地元の農業高校の学生さん達と協力して、イチゴから採取した酵母を使ったイチゴ酵母パンを開発しました。

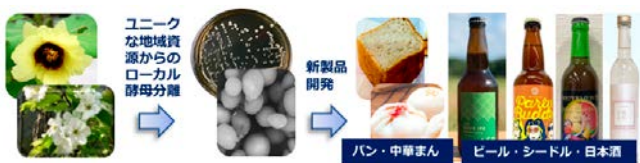


図2 ローカル酵母を活用した新しい発酵食品・飲料の開発

地域の皆さんへのメッセージ

それぞれの地方、地域には、いまだ発掘されていないローカル発酵微生物が、数限りなくひっそりと生息しています。それらを探索して地域のために大いに働いて頂くというのが、私たちのコンセプトです。地域に根ざしたユニークで魅力的な、全く新しい製品開発を考えておられる皆さんは、ぜひお声がけ下さい。私共のローカル酵母・発酵微生物がお手伝いします。



ローカル酵母

索引



教員索引

あ

赤間 一仁	6
秋廣 高志	9
足立 文彦	36
荒西 太士	12
池浦 博美	41
池田 泉	23
石井 将幸	72
石川 孝博	18
石田 秀樹	8
泉 洋平	57
一戸 俊義	32
上野 和広	74
上野 誠	54
氏家 和広	33
江角 智也	39
大沼 耕平	10
小川 貴央	24
小野 廣記	83

か

戒能 智宏	28
加古 哲也	44
門脇 正行	34
木原 淳一	55
木原 康孝	76
久保満佐子	58
倉田 健悟	66
桑原 智之	64
児玉基一郎	86
児玉 有紀	7
小林 和広	35

小林 伸雄	40
-------	----

さ

佐藤 邦明	67
佐藤 裕和	75
佐藤 真理	77
塩月 孝博	19
地阪 光生	29
清水 加耶	61
清水 英寿	26
城 惣吉	37
末永 千絵	47
須貝 杏子	17
巢山 弘介	59
宋 相憲	38

た

高橋絵里奈	50
高原 輝彦	13
武田 育郎	73
田中 秀幸	42

な

中務 明	43
長門 豪	69
中間由紀子	45
西村 浩二	30
ヌータラパティ ヘマンズ	25

は

橋本 哲	60
林 昌平	62
広橋 教貴	14
深田耕太郎	78
藤巻 玲路	63

古水 千尋 15

ま

松尾 安浩 27

松本 真悟 81

丸田 隆典 20

宮永 龍一 56

舞木 昭彦 16

や

保永 展利 46

谷野 章 68

山口 啓子 65

山口 陽子 11

山下 多聞 80

山本 達之 21

吉清 恵介 22

吉田 真明 82

吉村 哲彦 49

米 康充 51

ら

李 治 71

劉 佳啓 70

ロサリア ナタリア セレキー ... 48

キーワード索引

あ

ICT	48	カビ臭	62
アズキ	37、39	川歩き	75
穴掘り	56	ガン	25
安定同位体	66	環境情報	55
アントシアニン	43	環境ストレス	24
Eコマース	47	環境DNA	13
イカ	14、83	環境適応	11、17
域学連携	46	環境保全	32
生きた細胞	21	含水酸化物	64
育種	33、44	間伐	50
出雲おろち大根	40	観葉植物	44
遺伝系統	12	管路	72
遺伝子	18、24、28、43、82	機械学習	25
遺伝子多様性	37	気候変動	70
遺伝子ノックイン	10	技術革新	49
遺伝的攪乱	12	気象	36
イネ	6、9、35	希少生物	13
雲州人参	29	汽水域	66
影響評価	59	キノア(キヌア)	33
AI	25	機能性	41
エゴマ	22	ギャバ(GABA)	6
越冬	57	吸着	64
エネルギー代謝	32	休眠	42、57
園芸植物	41	共生窒素固定	37
温室	71	共存	16
温暖化	57	空気	78
音波	78	グルコース飢餓	27

か

海洋	82	クロレラ	7
香り	41	経営	48
カキ	39	蛍光バイオイメージング	30
花き	44	経済	47、48
可視化	21	ケイ酸	81
渇水緩和	60	継承	48
活性酸素	20	渓流水	63
カドミウム	81	ゲノム	82
		ゲノム編集	10
		健康	22

減災・防災	74	湿害	78
原生生物	8	地盤工学	77
豪雨	77	島	17
後継者	56	社会	56
抗酸化	28	遮光	71
洪水	75	収穫量	34
洪水緩和	60	収縮速度	8
酵母タンパク質発現ライブラリー	9	周年開花	42
コエンザイムQ ₁₀ (CoQ ₁₀)	28	周年放牧	32
コケ	15	樹冠	50
湖沼・河川	13	受精	35
コミュニティ	46	種分化	17
コメ	81	樹木	80
根系	80	情報通信技術	51
昆虫	23、56、57	植食者	61
昆虫の脱皮・変態	19	植生	58
コンピュータ	82	食農関連産業	46
コンピュータシミュレーション	72	植被率	34
根粒菌	37	食品	22、47
さ		植物	15、17、18、20、24、54、68
災害	76	植物遺伝資源	44
細菌	62	植物環境フォトニクス	68
再生可能エネルギー	71	植物貯蔵タンパク質	30
栽培	33、44、68	植物の病気	55
細胞周期	27	植物保護	19
細胞増殖	38	食物連鎖	66
細胞内共生	7	食用作物	35
砂丘	70	食糧機能増強	30
作物	34、36	女性組織	45
作物学	33	シロイヌナズナ	6
サクラ	39、42	進化	7、11、82、83
雑穀	33	進化放散	12
殺虫剤	19	新規物質	54
サツマイモ	34、36	神経系	10
里海	65	神経伝達物質	23
シアノバクテリア	62	人工知能	51
GIS(地理情報システム)	76	人工林	50
シグナル伝達	27	宍道湖	62、65
資源管理	12	宍道湖七珍	13
		ジンセノシド	29

森林	60	多環芳香族炭化水素	69
森林生態系	63	ため池	77
森林動態	58	多様性	15
森林土壌	63	タンパク質	24、26
水害	75	地域活性化	40、86
水圏	66	地域環境	76
水圏生態	12	地域ブランド	46
水源流域	60	チームサイエンス	15
水産資源	13	地下水	64
水資源	60	地球温暖化	35
水質	73	治水	75
水質形成	63	窒素代謝	32
水生汚染	69	着色	43
水生生物	65	中山間地域	46
水防	75	腸内環境	26
水路	72	腸内細菌代謝産物	26
数理モデル	16	地理情報システム	51
スギ	50	通気性	78
ストックマネジメント	74	ツツジ	40、43
ストレス	20	低温耐性	57
ストレス応答	27	抵抗性害虫	19
スピロストナム	8	底生動物	66
スプライシング	6	堤防	77
生育診断	34	適応	55
生活	45	適応進化	56
生活習慣病	26	適応戦略	61
精子	14	鉄	81
生態学	11	転移RNA (tRNA)	6
生態系	16、67	デンプン	36
生態毒性学	69	糖	36
生物多様性	16	頭足類	83
生物有機化学	23	土砂災害	77
生命	21	土壌	67、76、78、81
生理学	11	土壌生態学	63
繊毛虫	8	土壌微生物	59
走化性	14	土壌有機物	80
早期診断	25	トランスポーター	9
た		ドローン	51
ダイズ	37	な	
体組織発達	38	内分泌生理	38
太陽電池	71	中海	65

肉用牛	32	β -グルコシダーゼ	29
二酸化炭素	14	ペプチドホルモン	15
日本林業	49	防衛	61
二枚貝	65	防砂	70
乳酸菌	29	補酵素	24
ヌタウナギ	11	補修・補強	72、74
農業	35、48、54	ポストハーベスト	41
農業水利施設	74	保全	58
農業政策	45	ポルネオ	61
農産物	47	ま	
農村社会	45	マイクロプラスチック	69
農薬	59	巻貝	10
は		水	67
バイオテクノロジー	28、30	水処理	64
バイオ燃料	18	ミドリゾウリムシ	7
培養細胞	38	ミドリムシ	18
発酵食品	86	未利用地域資源	86
発生	83	ものづくり	67、86
発生生物学	10	や	
花	40	薬物受容体	23
半自然草原	58	薬用植物	44
反芻動物	38	野菜	40
光	55、68	有害イオン	64
飛砂	70	輸送体	9
微生物	54、62、67	用心棒	61
ヒ素	81	溶存有機物	69
ビタミンC	18、20	ら	
ヒノキ	50	ラマン分光法	21、25
病気	54	リモートセンシング	51
病原微生物	55	流域	73
病態発症予防	26	流通	44、47
品種改良	40	緑色蛍光タンパク質GFP	30
風洞	70	リン	73
物質循環	80	林業機械	49
ブドウ	39	歴史	45
分子	21、25	ローカル酵母	86
分子育種	20		
分子カプセル	22		
分子設計・有機合成	23		
分子認識	22		
分裂酵母	27、28		

編集委員会

委員長	清水	英	寿
委員	秋廣	高	志
	西村	浩	二
	米	康	充
	中務		明
	石井	将	幸
	長門		豪
	吉田	真	明
	谷野		章

国立大学法人 島根大学
生物資源科学部

2026年3月発行

〒690-8504 島根県松江市西川津町1060

TEL 0852-32-6492 / 0852-32-6493

FAX 0852-32-6125

<https://www.life.shimane-u.ac.jp>

